
嘘つき二人

一二三五六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つき二人

【Nコード】

N 4 5 6 7 M

【作者名】

一二三五六

【あらすじ】

正直者が嘘を吐かないのは道理だが、嘘つきが正直に話さないとは、限らない。

すなわち、嘘つきとはそれだけ不可解な思考回路の下にできおり、故に口火を切っても真実を伝えることしかできない正直者には、嘘つきを心から理解することは不可能だったのだろう。

到底、私にも不可能だ。

これより語られる物語には、嘘つきが二人登場する。

一人は言葉を用いて聴覚より騙す詐欺師。

一人は体を変化させ視覚より騙す代理人。

彼らは互いを忌み嫌い、そして同時に互いを羨望し合う。

舞台は、とある私立高校。

相対するは、鮮血に踊る、名も無き殺戮者。

一人の少女を救う為、はたまた一人の人間を騙す為、二人の少年
が嘘を吐く……………！！

序章・ヒミツの話

「ねえ、おにいちゃん」

ん？ なに？

「どうして、わたしたちには、なまえがないの？」

さあ……、ぼくにもわからないよ。でも、おかあさんは「なににもしばられず、じゆうでいるためだ」って言ってた。

「じゆう？　じゆうってなあに？」

……わからない。だけど、みんなみんな『じゆう』になりたがるんだから、きつと楽しいことなんじゃないかな。

「そっか。……でも、わたしは『じゆう』になりたくないなあ……」

？　どうして？

「だって、『じゆう』になったらおかあさんたちみたいに、たのしいこともかなしいこともなくなっちゃうんだよ？　それは……なんだかすごくかなしいよ……」

……。

「……おにいちゃん、わたしはね。『じゆう』じゃなくてもいいから、がっこうにいきたい。それでね、ともだちをつくっていっしょ

にあそぶの」

………そっか。

「だから、ね。おにいちゃん。いっしょにこのいえからにげよう？
それで、ふたりでくらそう」

………。

「ねえ、そうしようよ、おにいちゃん」

………それは、むりだよ………。

「どうして……っ。どうしてなの、おにいちゃん！ おにいちゃん
はずっとここにでくらしていたいの！？ ひとごろしいやじゃない
のっー？」

うつん、ここにでくらすのはいやだし、ひとも ころしたくはない
よ。

でもね、ぼくらはまだこどもなんだ。

まだちっちゃくて、よわくて、おとなにそだててもらわなきゃ、
いきていけないんだ。ぼくらは、おかあさんとおとうさんがいなく
ちゃごはんだってまともにたべられない。

「………そう、だよね。ごめんね、おにいちゃん。わがままなこ
とって」

いいよ。それより、ぼくの方こそ、ごめん。おにいちゃんなのに、

いもうとのおねがいをかなえてあげられなくて。

「いいの。それに、わたしにはおにいちゃんがいるから、だいじょうぶ。まだ……だいじょうぶ」

……そっか。

「うん。だから、おにいちゃんはどこにもいかないでね。ちゃんとちゃんとわたしのそばにいてね」

うん、わかった。やくそく。

「うんっ。やくそく」

あ、おかあさんがかえってきたみたい。

「そう……。じゃあ、おやすみ、おにいちゃん」

うん、おやすみ。

一章：表の面は偽り（前書き）

主な登場人物

・ ぼく……語り部。

・ 担任……たんにん三十路。仕事意欲無し。

・ 西牟婁枢……にしむろ かなめぼく同居人。自称《魔女》の二十代女性。緑髪に白衣。

・ 自称上岡くん《じしよう かみおかくん》……ぼくのクラスメイト。野球部一年。

一章：表の面は偽り

気が付くと、周りが閑散としていた。

どうやら考えに耽っている間に、ホームルームは終わってしまったらしい。教室を見渡すと、既にほとんどの生徒が教室から消えていて、今し方教室を出ていこうとしている女子生徒数名と、担任しかない。

中々、珍しい光景だと思った。

まあ、数名で仲良く談笑しながら出ていく女子生徒達は、さして珍しくはないとしても、いつもは不機嫌そうな顔でとつとと教室を出ていく担任が、今日は妙に嬉しそうな笑顔を浮かべて教室に居残り続け、出ていく生徒を見送っている。

これは珍しい、というか奇妙だ。怪し過ぎる。それに何だか気色が悪いし。

それは女子生徒達も思ったようで、担任の笑顔に一瞬固まり、そして戸惑い、精一杯の引きつった作り笑いで、けれど視線だけは担任から逸らしつつ、社交事例の挨拶を交わして教室から出ていく。担任の前を通る時に、歩く速さが三倍くらいになったのは言うまでもないだろう。つと、ばくも早く帰らなきや。西牟婁さんが帰ってくる前に、晩ご飯の準備を済ませないと。

椅子から立ち上がり、教科書や大学ノートの詰め込まれた通学用のバックを肩から提げる。後ろのドアから出ることも出来るけど、何となく、わざわざ担任の前を通ってみる。もしかすると、ぼくは

勇者の生まれ変わりなのかもしれない、なんて考えて、お前はここの中学生だ、と自分に突っ込みを入れる。

一人漫才。

どこことなく虚しい。

「じゃあな」

「はい。それでは」

にやけ顔の担任に軽く頭を下げ、未だ人の賑わっている廊下に出る。

人混みと喧騒に塗れた廊下は、熱気をふんだんに含んでいて立っているだけでも額に汗が滲んできそうだった。しかし、実際にドアの前でつつ立っているわけにもいかないから、人と人との間をすり抜けるようにして廊下を進んでいく。

階段を下り、また廊下を進んで下駄箱に出る。この学校の生徒の大半が何らかの部活に所属しているため、帰宅する生徒の少ない今の時間の下駄箱は、廊下とは反対に閑散としている。

だから、自分の靴が収納されている所まで、一直線に向かうことができた。

スニーカーを取出しスリッパと履き替え、下駄箱にはスニーカーの代わりにスリッパを収納する。

とんとん、と爪先で地面を蹴って、しっかりとスニーカーを履く。

靴を大事にするという強固な信念があるわけではないけれど、踵が潰れると履きにくくなるから、いつもそこだけには注意を払って履いている。……ん？　そもそも靴を大事にする人なら、爪先で地面を蹴ったりしないんじゃないのかな？　……………まあいいか。

ガラス戸の正面玄関を押し開けて外に出る。室内でも十二分に発揮されていた初夏の熱気が、さらにその温度を上昇させる。

長くて鬱陶しい髪が、太陽の熱を吸収して暑苦しい。そろそろ切ろうかなあ、とか考えるものの、紫外線嫌いな引き籠もりであるこのぼくが、こんな雲一つないような夏日に外出なんてできるわけがないので、結局髪を切りに行くのは諦める。

体育館とグラウンドに挟まれた、正門へ続く一本道を歩いていると、時折外周に向かう野球部の皆さんがぼくを追い越していく。こんなに暑い中本当ご苦勞なことだ、とその背番号の書かれた背中を見送っていると、不意に背後から名前を呼ばれた。

振り返るとそこには、なまじ高校球児とは思えない爽やかな印象の青年が、野球のユニフォームを着て、五メートル程離れた所に立っていた。……確か、「有岡くん」だったっけ？

「上岡だよ。同じクラスの上岡」

ニツと、名前を間違われたにも関わらず、爽やかな笑顔で訂正を入れる自称上岡くん。そうだったっけ？　と首を捻ってみるが、しかし、本人がそう言うのであればそうなのだろう、と心中で勝手に納得して、駆け足で近寄ってくる自称上岡くんを眺める。

離れていた時は気にならなかったけれど、近くで見ると自称上岡

くんは随分と背が高い。百八十は軽く越えているのではないだろうか。スポーツ青年だということもあり、ガタイもしっかりしていて、しかもファッション雑誌に読者モデルとして載っていきそうな程、顔立ちが整っている。背丈が低く、余分な脂肪がなければ必要な筋肉もないぼくとしては、色々と羨ましく感じる。

「……えっと、その同じクラスのクラスメイトさんがなんの用ですか？」

自称上岡くんを見上げながら訊ねる。正直、こんな所で立ち話なんてせずに早急に家に帰りたいんだけど、という本音は口に出さない。協調性はなくとも、社会性はあるつもりだ。

「いや、なんか知ってる奴が前を歩いてるなあと思って」

照れ隠しをするかのように、頬を掻きながら答える自称上岡くん。

お前は待ち伏せしていた好きな女子に、偶然を装って話し掛ける初な中学生か！ とは突っ込まない。

「『知ってる奴』と称される程、ぼくは貴方と接点を持っていないかったように思っんですけど。気のせいですかね？」

そもそもぼくは、出来る限り他人と関わらないよう尽力しているので、学校に知り合いはいないと言っていい。というか、ぼくに知り合いがいらないと言っていい。

だから、この自称上岡くんは、何か勘違いをしているか、それともぼくに何らかの理由で接触してきたかのどちらかだと思う。どちらかだと思うけど、後者みたいな奴はいないだろうし、いても

関わりたくないのの後者の理由は抹消する。と、自然この自称上岡くんは何か勘違いしているんだろう、と考えがまとまる。

「あれ？　もしかして俺嫌われてる？　もしかなくても俺、嫌われてる？　つかしいなあ、俺嫌われるようなことした覚えはないんだけどなあ」

苦笑しながら呟く自称上岡くん。いやいや、嫌われるようなことをした自覚があったら、それは苛めですよ、貴方。まあ勿論、ぼくは相手を汲み量る人間なので口には出さない。

「別に嫌ってはいないですよ。ただ、ぼくの記憶には貴方と会話、もしくは行動した覚えが全く無いんですよ。皆目見当が付かない、という奴です。ぼく、記憶力が壊滅的に悪いですから。次の日には、学校に行ったということくらいしか思い出せないほどですよ」

ま、嘘だけだね、と心中で付け加える。ぼくの記憶力は確かに悪いけど、壊滅的とまでではない、と思う。精々、人の顔と名前を一日足らずで忘れてしまっただけだし。お陰で未だ名前を覚えているクラスメイトは零だ。

しかし案の定、自称上岡くんはぼくの言葉をあつさりまるごと鵜呑みにしてしまい、　いや、自分で言っておいてなんだけど、そんな簡単に納得されると少し傷付く　嫌われていないと分かったからか、「良かった」と安堵の息を吐く。

「そっか。キミって忘れっぽいのか。そう言えば今朝も、『どうしてぼくの席に知らない人が座ってるんですか？』みたいなこと言ってたっけ。席替えしたことを忘れるっていうのはよくあるけど、三日間連続っていうのは珍しいよね」

「あう……」

醜態を指摘されたことと、その真似をされたことによって羞恥するぼくを見て、自称上岡くんは堪え切れずにくつくつ、と意地の悪い笑いを漏らす。爽やかな外見とは裏腹に、いたずらっ子の精神を内包しているらしい。なかなか小憎たらしい笑い方をするなあ。そんなだからいつまで経っても『自称』が取れないのだと気付けないのかっ！ まあもつとも、『自称』が付いたのは数分前からだし、当の本人は『自称』が付いていることすら知らないのだけど。

「ああいや、ごめんごめん。笑うつもりはなかったんだ」

しばらく笑い続けた後、ぼくの睨むような視線に気付いたのか、自称上岡くんは素直にぼくに謝罪してくる。……謝罪してくるのはいいけど、笑いながら謝るというのは一体どういう見なのだろう。そんな誠意の見られない、むしろ人を小馬鹿にするような謝辞は、相手の神経を逆撫でこそすれ、決して怒りを静めるに至る効果は出ないので止めた方がいいと思う。まあ、ぼくの心は狭くないので、そう思うだけに留めておくでしょう。

「でも、そっか。忘れっぽいのか。……じゃあ、今何を言ったところで無駄、なのか？」

と、自称上岡くんは完全に笑い終えた後、顔を真剣なものに変え、そう訊ねてきた。

だがしかし、そんなことを聞かれても困る。何せそれは嘘なのだから。虚実を真実に捻曲げる力なんて、ぼくは持ち合わせちゃいない。どこをどうしようとする偽りは偽りで、どれだけ偽りを偽り続けて

も偽り以外の何物でもない。裏の裏は表、とはいかないのです。

なので、ぼくは嘘を重ねることにした。

「そういうことはないんじゃないですか？ この世界に存在する物事には必ず意味があるように、この世に存在する森羅万象の、その一挙一動全てにおいて、無駄なことなんてないと思いますよ。こうしてぼくと貴方が会話していることでさえ、何かに何らかの影響を及ぼしている、という可能性も無きにしもあらず、です」

その影響が正負、どちらなのかは分かり兼ねますが、と、自分で言っていて吐き気がするような虚言を締め括る。

本当に、微塵も思ってもいないような事を、よくもまあスラスラと口に出すことができるものだ。我が事ながら感心する。そして、我が事だから呆れ果てる。一体ぼくは、日々をどれだけ嘘で塗り固めているんだろうか。

「……うーん、そうだな。ダメ元で、一応言っておこう」

だけどそんな戯言を聞いて、自称上岡くんは何かに踏ん切りがついたらしい。少しの間頭を悩ませた後、決心した様子で呟いた。

「？」

首を傾げるぼく。

話の流れからして、ぼくに何らかの関わりがある事らしいのだけど……さっぱり心当たりがない。

「明日か明後日 いや、今日から一週間は気を付けておいた方がいいよ。特に、普段の日常に無い出来事とか」

まるで、ぼくがどこかの殺し屋に狙われているかのようなことを言う。

誰かがぼくを殺す、なんてあり得ない とまでは言わないものの、限りなく零に近いんじゃないだろうか。何せぼくにはそんな価値すら皆無なのだし。

「……………それを言われると、こうして貴方と会話していることこそが、ぼくの日常には無い明らかな異常なんですけれどね」

「ははっ、まあそうだな。俺が君と話しているこの状況が、もしかしたら何かの予兆なのかもしれない」

皮肉を言ったのにまるで効果無し。 あっさり受け流されてしまった。

彼が鈍感だというわけではないだろう。 いや、もしかしたらそうなのかもしれないけれど しかしそれ以上に、この自称上岡くんは人から向けられる直接的な感情 敵意や悪意は勿論、好意や善意すらも を簡単に受け流せてしまうのだろう。

ときには、自覚的に。

ときには、無自覚に。

そこが、少しだけ 似ているかも、しれない。

と。

まだ、ほんの少ししか会話していないにも関わらず、そんなことを

思っ

しまった

「あ、あの」

「あ、ごめん。そろそろ外周行かなきゃ、また先輩に怒られるって何か言った？」

「あ……………、いや。…………何も……………」

「そう？　ならいいんだけど」

じゃあね、と軽く手を上げて駆けていく自称上岡くんを、呆然と見送る。

自称上岡くんが去る直前、ぼくは何と言いたかったのだろう。何が言いたかったのだろう。自然と、無意識の内に発していた言葉の続きは　　いったい何だったのだろうか。

それは　　ぼくにわかるところでは、なかった。

「……………」

まあ、取り敢えず帰ろうか。

2：緑の魔女（前書き）

主な登場人物

・ぼく……語り部。『まあ』が口癖。

・西牟婁^{にしむろ}軀^{かなめ}……自称《魔女》の二十代女性。どんな仕事をしているのかは不明。

・牧原詩織^{まきはら しおり}……お隣に住む三人家族の一人娘。得意科目は算数。

2：緑の魔女

「よし、こんなもんかな」

テーブルに並べた料理を眺めて、頷く。内容は、メインの豆腐ハンバーグと、あとは彩り、健康などを考慮した付け合わせが三品の計四品。あまり豪華とは言えないけど、しかし質素というわけでもない。

まあ、豪華と言っても、フルコースの料理を作る必要も時間もないし、それにフルコースなんて出したら、西牟婁さんが「私を太らせる気かつ!!」と激怒する。あの大食らいさんは平気で二人前くらい平らげてしまうくせに、妙なところを気に掛けるのだ。ぼくから見れば、いつもいつでも好き勝手にお腹一杯になるまで食べているような感じなのだけれど、しかし彼女自身には何かルールがあるらしく、何かとつけて、低カロリーな料理を作れとうるさい。なら少しは自制しろよ、と言いたくなることもしばしばある。居候の身の上故、そこは自粛しているけど。

エプロンをハンガーに掛け、テーブルを挟むようにして置かれた二つの椅子の片方に座る。テレビの電源を入れ、一通り現在やっている番組を眺めてみるも、どのチャンネルもあまり面白そうな番組をやっていない（大半がお笑いの番組かメロドラマだった）。結局、ぼくはリモコンを何回か操作した後、テレビの電源を切った。

息を吐き、椅子の背もたれに背中を預けて天井を見上げる。天井に取り付けられた電灯は、部屋全体を隅々まで照らしている。

その内の一つをしばらく眺め続け、その眩しさに耐え切れず目を

閉じた。ぼんやりと残っていた電灯の光が僅かずつ消えていき、数秒後には暗闇のみが視界を埋め尽くす。そして、それに比例するかのよう^にに、自然と意識は聴覚へと集中していった。

静寂に包まれた室内。しばらく前まで聞こえていた、お隣に住む三人家族の一人娘　牧原詩織ちゃんのはしゃぐ声も、今は聞^こえない。時間が時間だし、もう眠ってしまったのだらう。……いや、『もう』ではないか。普通、小学生が起きている時間じゃない。

と、そんなことを考えていると、玄関からドアを開閉する音が聞^こえた。閉じていた瞼を開け、時計を見る。

現在、午後十時ジャスト。

晩ご飯の時間としては、遅過ぎるくらいだろう。

しかし、ぼくと西牟婁さんにとってはそれがデフォルトだ。たまに、日にちを跨いでしまうことだってあるし、晩ご飯が朝ご飯になることも年に二回くらいはある。

ともあれ西牟婁さんが帰ってきたらしい。

預けていた背中を背もたれから離してピンと伸ばす。そして、体ごと廊下を向き、我が家主の帰宅を出迎える。

「ただいま……」

力のない声とともに開かれたドアの奥から、西牟婁さんは疲れ果てた様子で現れた。

「おかえりなさい。今日も時間ぴったりですね」

「……正確には、既に二十秒経過しているがな。あゝお腹減った。まったく、あのシスコンは人使いが荒過ぎだ。俗称通り腹黒な鬼畜だな、あれは」

仕事の話なのだろう。ぼくにはよく分からないことをぼやきながら、西牟婁さんはテーブルに近づき、料理に腕を伸ばして摘もうとする。ぼくは椅子から腰を上げ、その腕を横合いから掴んで制止させる。

「駄目ですよ。手を洗ってからです」

「……君は私の母親か」

しばしの睨み合い。

折れたのは西牟婁さんだった。

ちっ、と舌打ちをして西牟婁さんは洗面所へ消えていく。その後ろ姿を見送りつつ、ぼくは椅子に腰を下ろした。

西牟婁枢。

ぼくの保護者代わりのような人で、ぼくの命の恩人みたいな人。

切れ長の目に、長い睫毛。腰の辺りまでときそうな髪は、大抵ポニーテールにまとめられている。百八十を越えているのかは不明だが、一般男性よりはやや高い背丈に、出る所は出ていて、引っ込む所は引っ込んでいる抜群のプロポーション。所謂モデル体型と

いうやつだ。化粧をしないにも関わらず　　というか化粧すらも必要ないくらいの美人で、たぶんこんな美人さんには一生を賭けても遭えるかどうか、というくらいには美人である。

とまあ、ここまでではいい。

ここまでではいいのだけど、しかし悲しいかな、（こうして、ぼくなんかと同居していることからわかる通り）この人には、美人であるという要素を帳消しにするほどの特異に満ちた特徴がある。

例えば　ポニーテールに結われたその髪の色が、緑に染められていたり。

例えば　医師でも科学者の類でもないのに、常時白衣を羽織っていたり。

例えば　「巷で私は魔女と呼ばれている」と何故か嬉しげに自慢したり。

つまるところ要するに、変人なのだ。

そんな人と、ぼくがどうしてこんな同居生活を始めたのかと言えば　実のところ、それはぼくにもよくわからない。西牟婁さんは「依頼だよ、依頼」と言っていたけれど、それを誰が依頼したのかは教えてくれないし、そもそもそんな依頼があつたのかさえ怪しい。

まあ、西牟婁さんがどういう理由で、どういう経緯でこんな立場になったのなんてことは、ぼくが知る旨も無ければ、ぼくの知るところでもない。紆余曲折に紆余曲折が折り重なって、結果こうしてぼくは高校に通い、食卓を囲んでいられるのだから、その内情を

知ろつとするのは野暮つてものだろう。

「おーい、手洗ってきたぞ。早く食べようっ」

……わざわざ手を見せびらかせなくても。

最早ご飯のことしか頭にない食欲魔神　いや、食欲の魔女Nさんはガタガタと音を立てながら椅子に座り、「いただきます」と言うや否や豆腐ハンバーグを口に運ぶ。今まで待っていたばかりの立場は？　と思わなくもない。

そうして始まった騒がしい（約一名の魔女さんが箸と食器をぶつける音が主因）晚餐は、「一番可愛い小動物は何か」や「果たしてお好み焼きにマヨネーズをかけるのは邪道なのか」といった、特筆するまでもないような取り留めのない議論を交わしつつ終了し、ぼくがキッチンでお皿を洗っていると、ソファーに腰掛けてテレビを眺めていた西牟婁さんが、不意に言った。

「ところで、『人間失格』という有名な小説があるが、しかし私はこの世に失格した人間なんて　そもそも合格した人間なんてものが存在するのか、甚だ疑問だな。人間なんてものは最早動物として失格している　否、動物として失格している生物こそが人間と言うべきか。食物連鎖から脱し、動物の頂点に達していると勘違いしている輩もいるが、それはまったく的外れだ。食物連鎖とはこの世界に創られた唯一の秩序、謂わば絶対に遵守しなければならないルールなのだ。それを崩すという行為は、この世の毒でしかない。つまり、失格をした存在こそが人間であり、だから更に人間から失格するなど不可能に近い所業ではないのか、と私は思うのだ」

「……はあ」

見ると、西牟婁さんが眺めるテレビからは、ニュースが流れていた。それは、長物で斬られたような死体がこの近所で発見されたというものだった。

視線を戻し、ぼくはスポンジでお皿を洗いながら、答える。

「そうですか。しかしそれは、言い換えれば人間以外の動物が人間から失格している、と言えなくもないんじゃないですか？ 普通というのは過半数を占めている事柄のことを言いますが、しかし普通が正しいとは限らないでしょう？ 普通とは、あくまで一般論です。食物連鎖に加わっていることが普通であっても、それから逸脱することが正しいという可能性もあります」

「いや、それはないな」

「そうでしょうか？」

「ああ、それに関してだけを言えば、私ははっきりと否定できる。それは、絶対にあり得ない。もし仮に もし仮に、食物連鎖から逸脱することが正しいとしよう。だがそれならば、どうして食物連鎖というものが存在する？ 人間が正しいのなら、最初から人間のように生きる生物しか存在しない。そうだろうか？」

「まあ、そうでしょうね。ぼくも、ただ言ってみただけですし」

お皿を洗い終え、タオルで手を拭きながら言う。

弁解しておけば、別にぼくは、相手の言い分に一々反論しなければ気が済まない捻くれ者ってわけじゃない。ただ、反論しなければ

会話が続かないと思ったただけだ。

結果的には、大差なかったけれど。

「まったく、思い付きをただ口にするのはやめろといつも言っているだろう。……しかし、『普通が正しいとは限らない』というのは面白いな」

「そうですか？　ぼくとしては当たり前のことを言っただけなんですけど」

「ああ、面白い。通常、大体の人間は『普通』であろうと、周囲に溶け込もうとするものだ。まあ、反抗期の子供など例外はいるが、大人になれば大半はヘタに特出することに対して恐怖にも似た感情を抱く」

因みに私は例外に部類される、と西牟婁さんはこちらに笑みを向けてくる。

……それくらい、理解していますよ……。

「で、そういった強迫観念により、周囲に溶け込むこと　つまり『普通』　は『正しい』という方程式が出来上がっているんだ。だが、君の言った通り普通が正しいとは限らない。ほら、面白いじゃないか。大半の人間にとっての『正しい』は『正しいとは限らない』んだ」

「はあ……」

「よくわからない、といった表情をしているな。なるだけ碎いて説

明したつもりだったが……まあいい。君は一般的価値観に捉われて自己の価値観を失うのは愚かだ、ということだとも思っておけ」

「はあ……。一応は、心に留めておきますよ」

そうしておけ、とテレビ鑑賞に戻る西牟婁さん。

何だか、ぞんざいに扱われたような気がする。けれど、それは理解できていないばかりも悪いのだし、ここで憤りを抱くのはお門違いだろう。

……っと。

「それより西牟婁さん、早くお風呂に入っちゃって下さい。もうすぐ日付変わっちゃいますよ」

「む、もうそんな時間か。じゃあ、そうするかな」

そう言ってテレビを消して立ち上がる西牟婁さん。しかし脱衣室に向かう途中、何を思ったのかふと立ち止まりこちらを振り向くと、

「？ どうしました？」

「君も一緒に入るか？」

妖艶な笑みを浮かべ、訊ねてきた。

「……………は、はいっ！？」

予想外の言葉に、つい、柄にもなく大声を上げてしまう。

「な、なな何を言っているんですか、貴女はっ！！　む、無理ですよ、無理。不可能です。摺り粉木で腹を切るが如し、大海を手で塞ぐが如しですよ！　空に標を結う方がまだ実現可能です！」

「何もそこまで言わなくてもいいだろうに。……何だ、恥ずかしいのか？」

「当たり前じゃないですかっ！！　それに女性が堂々とそんなことを言わないで下さい。少しは恥じらいというものを持ちましようよっ！！」

「恥じらいなんて、私には縁遠いものだ。そんなものを持っているやつが、こんな格好で街の往来を歩けると思っているのか？」

「……………自覚、あつたんですね」

思わずテンションが通常に戻ってしまうくらいには驚きです。

「というかそれ以前に、ぼくは先にお風呂頂いてます」

すっかり忘れちゃってたけど。

「そうか。それは残念」

笑んだままにそう呟く西牟婁さんは、あまり残念そうには見えなかった。やっぱり、ぼくをからかっていたのだろう。してやられたって感じた。こういうのって、掌の上で踊らされたって言うのだろうか。

「……はあ、今でどつと疲れました。ぼくはもう寝ますけど、西牟婁さん」

と、一度言葉を区切り、続きの言葉を強調する。

「いいですか？ クーラーとテレビの電源、及び電灯はきちんと消して寝て下さいよ」

「……ああ、わかったわかった。わかり過ぎるほどわかったから早く寝ろ」

鬱陶しそうに顔をしかめながら、しっしつとジェスチャーも交えて伝えてくる西牟婁さん。本当にわかつているのだろうか？

「……まあ、いいですけどね。では、おやすみなさい」

挨拶をして、自室のドアを開けようとノブに手を掛けたとき、西牟婁さんが何かを思い出したかのように「あ」と声を漏らした。

その声に、ぼくはノブを回す手を止めて西牟婁さんを振り返る。

「そうだ。これから一週間、身の回りには気を付けておけよ。私も警戒しておくが、君が注意するに越したことはないだろう」

「はあ……、よくわかりませんが、わかりました」

「そうか。ま、私が言いたかったのはそれだけだ」

「そうですか。では改めて、おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

今度こそドアを開けて自室に入り、ベッドの中に潜り込む。

しかし西牟婁さん、まるでぼくがどこかの殺し屋に狙われているかのようなことを言うなあ。ぼくが狙われる可能性なんて零に近いというのに。

「ふぁ……」

まあいいや、寝よう。

……。

あれ？ 前にも似たようなこと言われなかったっけ？

3：真つ赤な （前書き）

登場人物紹介

・ぼく……語り部。日本食なら大体作れる。

・西牟婁にしむろ軀かなめ……自称《魔女》の二十代女性。髪が緑色。よくわからない人。

・牧原詩織まきはら しおり……お隣に住む三人家族の一人娘。小学三年生。美少女だと思う。

・牧原久遠まきはら くおん……詩織ちゃんの母親。少女趣味。レディースの元総長で、西牟婁さんとは犬猿の仲。年齢を訊ねたら殺されかけた。

・自称上岡くん《じしよう かみおかくん》……ぼくのクラスメイト。野球部一年。爽やかなイケメン。西牟婁さんとは違う意味でよくわからない人。

3：真っ赤な

いつも通りの朝。

いつも通りに起きて、いつも通りにやって来たそのリビングは、そこだけを世界から切り離れたかのように、日常から乖離したものに変貌していた。

途方もなく赤く、

果てもなく紅く、

そして 朱い。

床が、カーペットが、テレビが、テーブルが、椅子が リビングにある全ての物が赤い液体に塗り潰されていた。

恐怖に、足が震えているのが分かる。

身体に力が入らない。

声を出そうとしても音は出ず、口は呼吸が苦しくなるまでに渴いていた。

「……………おとう、さん……………」

一秒か、あるいは一時間か。随分と時間が経過したような気がする。ようやく出てきた声は、驚くほどにか細く、震えていた。

返事はない。

それも当然。何故なら眼前に転がる『それ』は、人間かどうか本当に生物だったのかどうかさえ不思議に思えるほど斬り刻まれた、赤い肉片の群れなのだから。

だけど 問い掛けずにはいられない。

もしかしたら、これは別の誰かの塊で、生きているお父さんがどこかに隠れているんじゃないか、という可能性を捨てられないから……いや、そうじゃない。そんな『願望』を捨て切れていないから、こんな『現実』を受け容れられないから、だ。

「……おかあさん？」

今度は、更に奥に転がる同じような肉片の塊に目を向け、問い掛ける。

当然、返事はない。

始めから リビングの惨状を見た時から、気付いてはいた。

無意識の内に、理解していた。

両親は、死んでいるのだ、と。

だけど、それを受け容れることができなかった。許容することができなかった。

…………正直に白状すると、両親のことは嫌いだった。

大嫌いだった。

死んでしまえと思ったことは何度だってあるし、実際に殺してしまおうかと考えたことだって、数えきれないくらいある。本当に両親が死んでくれたら、両手を上げて喜ぶだろうと、そう思っていた。

思っていたのに……。

なのに

なのになのに、

なのになのに、

なのになのに、なのになのに、なのになのに、なのになのに、
なのになのに、なのになのに、なのになのに、なのになのに、
に…………っ！

夢を見た。

過去の記憶を投影した、ただの悪夢を。

「というわけで、今日のぼくはいつもよりロウなテンションでナー
バスなのですよ、はい」

まあ、だから何だって話なんだけどね。

しかも、まさかの夢才チ。

落ちているのかは甚だ疑問です。

通学途中、気分を一新させるためにわざわざ呟いてみたけれど……しかしどうだろう、更にナーバスな気分になった感が否めない。と言うか、嫌な夢だったというのに、どうしてぼくはその内容をわざわざ思い出してしまったんだろう。……ぼく、バカなのかな？

まあ、感情というものの自体が限りなく不確かで曖昧模糊としているものなのだから、それが自身のものであったとしても、その行動原理を一から十まで理解するのは不可能つてものだ。結局、人間には相手を知ることだって、自身を知ることだって出来やしないんだから。

とか何とか考えていると、後方から可愛らしい声が返ってきた。

「そうなんですか。しかしくうさん。あたしは、あなたはいつもそんな感じだと、そう思いますけれど」

「んー、そうかな？ まあ、そう思われていたら思われていたで若干傷付くものがあるんだけど」

「そう言われましても。あたしは思ったことを思ったままに口にしただけですから。あたしは悪くありません。悪いと言うのなら、それはそう思わせるくうさんこそ悪いのです」

「むう。そう言われると、何だかぼくが悪いような気がするけれど、しかしそれよりも詩織ちゃん、言葉を選ぼう。素直過ぎることは、

時に人を傷付けるんだよ。ある意味嘘を吐くこと以上に………つて、あれ？」

……詩織ちゃん……？

あまりにも自然に返事が返ってきたから、ついばくも普通に会話しちゃったけど、よくよく考えれば独り言に返事が返ってくるはずがない。後ろを振り返ると、そこには赤いランドセルを背負った女の子が立っていた。

ぼくの腰くらいまでの背丈。大人びた雰囲気。肩の辺りまで伸びた絹のような黒髪を、母親である久遠さんの趣味であろう赤い飾りの付いた子供っぽいゴムで纏めている。服装は半袖の黒いパーカーにフリルの付いた赤のスカート。足を包む白のハイソックスに、水色を基調にデザインされたスニーカー！。

そこに立つ女の子は、見紛うことなく、お隣に住む三人家族の一人娘　牧原詩織ちゃんだった。

「……詩織ちゃん、気配を消して近付くのは止めて下さい……」

「おはようございます、くうさん」

ぼくの言葉を軽く無視して、礼儀正しく（礼儀正しいのか？）お辞儀をする詩織ちゃん。一応、ぼくもそれに倣って頭を下げる。小学生が挨拶をして、歳上であるぼくが挨拶をしないのは、よろしくない。

しかし　油断していたとはいえ、まさかまさかこのぼくが背後を取られて、その上更に、その存在にすら気付けなかったなんて…

…。その所為と言っわけじゃないけど、ついうっかりタメ口で会話をしてしまった。

もしかしたら案外、西牟婁さんの言っていた気を付けないとならない相手つてのは、この子のことなんじゃないだろうか？ 歩調まで完璧ばくに合わせていたし。

……………まあ、それはないだろうけどね。女の子で小学生だし。

「くうさん、それは偏見というものです。人間の可能性は無限大なのですよ？ 人を見掛けで判断してはいけません」

「あれ？ もしかして口に出てましたか？」

「いえ。あたしの特技である読心術を駆使したまでです」

「読心術……っ！？」

隣に住む普通の小学生だと思っていた女の子が、まさかそんな奇想天外奇妙奇天烈な特技を持っていたとは……………っ！

世界は広いと言うか、狭いと言うか。うん。驚きだ。

衝撃の事実にうんうんと頷きながら感嘆していると、詩織ちゃんが鳩が豆鉄砲を喰らったような戸惑ったような表情をした後、申し訳なさそうに呟いた。

「……………あの、嘘ですよ？」

「いやあ、しかしそうなる何だか気恥ずかしいなあ。家族に対し

ては甘えん坊なのに、何故かぼくの前ではクールぶって可愛いなあ、とか思っていたのがだだ漏れだったわけか……………って、嘘っ!？」

「……………そういう今だって思考がだだ漏れてますよ、という突っ込みよりもまず、突っ込みに入るまでが長いということを、あたしは突っ込みます……………」

小学生にダメ出しをされました。

だけど、それよりもぼくの言葉に仄かに顔を赤くして俯き、それでもクールに振る舞おうとする詩織ちゃんの可愛らしさに目がいくぼくは、最早末期なのかもしれない。

「それよりくうさん」

と、詩織ちゃんは話題を変える。

「あたしのこの口調は癖みたいなものなのですが、しかしうつかり忘れてしまうということはつまり、くうさんのそれは故意 言うなれば設定、あるいはキャラ付けのようなものなのですか？」

「ううゝん……………」

ぼくは唸る。

『設定』『キャラ付け』 か。

言い得て妙だ。

確かにぼくの口調にはそれに近いものがある。ただ、それと微妙

に違うのは、その『設定』がぼくのものではない、ということだろうか。『設定』、『キャラ付け』みたいに言い表すのなら『仮面』。

『仮面』を被り、『別人』に化ける。

たぶん そんな表現こそが、ぴったりなんだと思う。

「まあ、概ねそんな感じですよ」

だけど、そんなことを詩織ちゃんに言っても意味はない。苦笑しながら曖昧に肯定する。

「そうですか」

詩織ちゃんは、そうつまらなそうに呟き、

「あたしは、昔の恋人が何かの真似をしているのかと思っていたのですが、違いましたか」

そして、つまらなそうに言った。

「まさか。今も昔も、ぼくに恋人はいないよ」

自嘲混じりに言う。

そう、ぼくに恋人はいない。

だから正確には 昔の想い人、だ。

今は亡き　ただ一人の家族だった人、だ。

詩織ちゃんは幼いながら、中々勘が鋭いらしい。

「くうさん、恋人いないんですか？」

「え？　あ、うん」

急な話題転換に一瞬戸惑ったものの、詩織ちゃんの問いに頷く。

「今まで、誰かと付き合ったことは一度もないですよ？」

「そうなんですか。くうさん、可愛い顔立ちだからモテそうなんですけど」

「……………」

…………えっと、それは喜ばいいんだろうか。それとも怒ればいいんだろうか。ぼくの立ち位置が微妙なだけに判断に困る。

「……………ありがとうございます」

少し悩んで、結局どっち付かずにお礼を言うておくだけにした。何事にも結論を求めるのは、間違いですよ。

と、そんな会話を繰り広げていると、後方から声を掛けられた。

なんだろう、最近は後ろから話し掛けるのが流行っているのだろうか？　なんて疑問を抱きつつ立ち止まって振り返ると、そこにはどこかの雑誌で読者モデルでもやっていそうな、長身で爽やかな顔立ちの青年が立っていた。

「や、おはよう」

片手を上げ、爽やかに挨拶をしてくる青年。

……はて、どこかで会ったことがあるようなないような……。

「名前は確か……片岡くん……だっけ……？」

「上岡だよ、上岡。いい加減覚えてくれてもいいと思うんだけど……」

ハハ、と苦笑いを浮かべる自称上岡くん。

そうだったそうだった、この青年は自称上岡くんだった。

今日は、昨日会ったときみたいな野球部のユニフォームではなく、普通にブレザーの制服を着ているけど、朝練には参加しなくていいのだろうか？

「ん？ ああ、いや、今日は休ませてもらったんだよ。ちょっと利き腕を怪我しちゃってね」

たはは、と自称上岡くんは照れたように笑い、包帯が巻かれた右腕を見せてくる。僅かに包帯が赤く滲んでいるのが少し気になるけれど、文字通り他人の傷にわざわざ触れる必要もない。「それは、災難でしたね」と適当に流す。

「あ、そう言えば詩織ちゃん。この人とは初対面……って、あれ？」

自称上岡くんを紹介しようと隣を見ると、そこには誰もいなかった。ぐるりと辺りを一周見渡してみても、あの小さな体軀は見つからない。

「一緒にいた女の子なら、俺が来た途端にあつちに走っていったけど？」

ぼくの行動から気が付いたんだろう。自称上岡くんは五メートルくらい先にある、分かれ道の右側を指差しながら言った。

「そうですか」

大方、小学校に行ったのだと思うけど（というか、それしかないだろうけど）、しかし急用でも思いついたのかな？ 詩織ちゃんは見知りしない人のはずだし、初対面の自称上岡くんを避ける理由もないと思うのだけど……あ、もしかしてイケメンが嫌いなのかな？

だったら共感できるんだけどなあ。

イケメンなんて、五臓六腑を撒き散らして、その外見が分からないくらいに惨たらしく死んでしまえばいいと思う。

「」

「なに、同志かもしれない人物を発見した怪しい宗教の教徒みたいな顔で頷いてんの？」

「いえ、何でもありません」

何でもないんです、ホントに。

「そう？　だったらいいんだけど。……………取り敢えず学校行こうよ」

「はい」

ぼくが頷くを見て、自称上岡くんはぼくの隣に並ぶ。それを黙認しつつ、ぼくは詩織ちゃんが行った方向とは反対の　分かれ道の左側に向かって歩き出す。

うーむ、小学校と高校の道はここで分かれるので、どう転んでも詩織ちゃんとは別れるしかなかったわけだけど、出来れば別れの挨拶くらいは言いたかったなあ……。

「何だか、彼氏が引越しをすることを当日になって知った彼女みたいなことを言うね」

「あれ？　また口に出してました？」

「またって……」

呆れた様子の自称上岡くん。

……………この癖、早く治さないとなあ。ぼくの特徴が『思ったままを口にする』から『思ったことを口にする』に変わってしまいうだ。

4：終わり、改め終幕（前書き）

登場人物紹介

・ぼく……語り部。結構鈍感な方らしい。

・自称上岡くん《じしょう かみおかくん》……ぼくのクラスメイト。野球部一年。爽やかなイケメン。本当に野球部なのか怪しくなってきた。

・まきはらしおり牧原詩織……お隣に住む三人家族の一人娘。小学三年生。どこか
聡い女の子。

4：終わり、改め終幕

「そんなことより」

と自称上岡くん。

ぼくの特徴が『思ったままを口にする』から『思ったことを口にする』に変わってしまうかどうかという、ぼくにとってみれば至極重大な問題を『そんなこと』呼ばわりされたことは、まあ気にしないでおこう。自称上岡くんに悪気があったわけではないし、それに何より ぼく、大人ですから。

というのは冗談だけど、でも実際大人でありたいとは思っている。故に、たかだかぼくの特徴が『思ったままを口にする』から『思ったことを口にする』に変わってしまうかどうかという至極重大な問題を『そんなこと』呼ばわりされたくらいで、怒ったりはしない。

「ん？ 何かどんどん歩くスピードが速くなってない？ 速くなってるよね？ ちょっ！？ おーい、待って、待っ……………」

怒ったりはしないんだ……………っ！

閑話休題。

そして、数分後。このまま無視し続けてもどうせ同じ教室で授業を受けるわけだし、それに後々気まづくなってもあれなので、後ろから走って追い掛けてきていた自称上岡くんが追い付くのを待って（何故か十メートルくらい離れていた）、それから学校へと再び歩

きだす。

「……で、何ですか？」

「……………え？」

息も絶え絶えな自称上岡くん。これで野球部だなんてよく言えたものだ、と言う資格は、彼をこんな状態にまで追いやったばかりにはやはりないのだろう。なので、何事もないかのように会話を続ける。

「さっき、何か言いかけてたじゃないですか」

「……………あ、ああ……………あれ、ね」

はあはあ、と歩くことすら辛そうに肩で息をしながら頷く。

むう、何だか少し申し訳なくなってきた。心なしか自称上岡くんの上半身が前に傾いているような気がするし……………いや、だがしかし！ここでぼくが謝ってしまったら、それこそ自称上岡くんの面子丸潰れだ。そんなことをしてしまえば、『自称』上岡くんが『通称』上岡くんになってしまう！

まあ、帰宅部であるぼくに体力で負けているって時点で、もはや面子もあつたもんじゃないと思うけど……………。

「……………あれ？　どうかしましたか？」

「……………いや」

？　何だか自称上岡くんが、最早精神も体力も限界というところ

でどこかの無神経な馬鹿がうつかり漏らした一言にとどめを刺された、みたな感じに落ち込んでいるような気がするのだけど……………気のせいだろうか？ 自称上岡くんは変わらず前傾姿勢のままなんだけど、陰鬱でどんよりとした空気がその周囲を漂っているような……………。

「……………ねえ」

「はい？」

「キミってよく、天然だって言われない？」

「いえ、言われませんけど……………」

答えると、自称上岡くんは「はああ……………」と盛大な溜息を吐いた。

「……………何が何なのかさっぱりわからない。どうしてもぼくが天然呼ばわりされなきゃならないんだろう。」

……………謎だ。

「何を言おうとしたのか、だったよね」

自称上岡くんの意味不明な問いに首を捻っていると、いつの間にか復活した自称上岡くんが言った。

「あ、う いえ……………はい……………」

普通に「うん」と頷きそうだったところをギリギリで気付いて「はい」に言い換えたけど……………大丈夫だろうか？

しかし、詩織ちゃん相手ならまだしも自称上岡くんの前で油断するなんて……やっぱりぼくは、まだまだだなあ。

「えーっと、何だっけかな……ああ、そうだ。キミはさ、悪いことをしたから罰を与えるんじゃないかって、良いことをしたから褒美をあげる方が良いんじゃないかとは、思わないかな？」

「何だか物凄く突拍子もない質問ですね」

「……うん、俺もそう思うよ」

自称上岡くんはそう苦笑する。

自分から聞いておきながら、何なのだろうか　とは思うものの、形はどうあれその発言を促したのはぼくなのだから、やはりその問いに答えなければいけないだろう。

うーん、と唸りつつ考える。

確かに、良いことをして何かが貰えるのなら、たぶん多くの人が率先してその『良いこと』をするだろう。そしてそれは、良いことなのかもしれない。高いリスクを払って悪いことをするよりも、リスクもなく感謝もされて何かを得る方がどう考えても良いだろうし、それに何より誰も損をしない。

だけど

「その考えに賛同はできませんね。まあ、ある種の共感は覚えますが、しかしその考えは安直過ぎです」

そう言い切って、自称上岡くんの顔を見上げる。

ぼくは彼の考えをばっさり否定したわけだけれど、しかし見上げたその顔は怒ってるいるわけでも、笑っているわけでもなく、ただ何か懐かしむような　　そんな顔をしていた。

「だよ。だから、俺もそう問い掛けてきたやつに言ってやった。キミとは違う言葉だったけど、否定してやったよ」

「これは貴方が言い出したことではないんですか？」

「うん。これは……昔つるんでたやつが本当に唐突に、何の気なしに訊ねてきたことなんだ」

「そうなんですか」

その自称上岡くんと昔つるんでたって人も、また随分と変な質問をしたものだ。この場にいないどころか見たことも会ったこともない人の悪口を言うのは気が引けるけれど、愚直というか愚考というか人間の悪意というものをまるで度外視した考えだと思う。言ってしまうえば夢物語のようなものでおよそ現実的じゃない。

「しかし何故、それをぼくに訊ねたんですか？」

「ん？　ん、何でだろうね。そいつとキミが少し似ているから、かな？」

眉を寄せ、難しい顔をしながら自称上岡くんは答える。

「はつきりとししないでですね。それにぼくは、その人ほど人間として壊れてないですよ」

「ははっ、だろうね。キミは人間としては随分とまっとうな方だし、『アイツ』とは全然似ていない。だからこそ、あいつに似ていると思ったのかもしれないけど」

……何だか、自称上岡くんが凄く矛盾したことを言っていると思うのはぼくだけだろうか？ あいつに似ていないからこそあいつに似ているって……。

「貴方の言っている意味がわからないんですけど」

「そう？ ……ああ、そっか。少し遠回し過ぎたね。一応キミを氣遣ったつもりだったんだけど、それじゃ伝わらなかったか。ふむ、じゃあ、はつきりと言おう」

と、そこで何故か、自称上岡くんの言葉をそれ以上聞いてはいけないような、今すぐにでも何としてでも自称上岡くんを黙らせなければならぬような、そんな危機感にも似た錯覚がした。

思考する前に身体は動く。

何かを否定するように、何かを受け容れるように、ぼくの両腕は自称上岡くんの喉元へと伸びていき、そして

「キミはキミの『お兄ちゃん』とは全然似ていない。キミは嘘つきには絶対になれない正直者だ。でも、それでもキミは嘘つきに『お兄ちゃん』になろうとしている。そういうところが、昔つるんで

たやつ……キミで言うところの『人間として壊れた人』に少し似てるんだよ」

ぼくが首を絞める前に、自称上岡くんは言葉を発していた。

彼の喉元寸前まで伸びていた両手が、力なく下に落ちる。その腕は肩を支点にぶらぶらと前後に揺れ、数秒後に静止した。

ぼくは、そんな紛れもない自分の身体の動きを、まるで他人事のように　否、まさに他人事としてしか、感じ取ることができなかった。

今。

今、目の前にいるコイツは何と言った？

『キミのお兄ちゃん』と、そう言ったのか？　何故？　それはぼくに兄がいることを知っているからだ。ではコイツが兄を『嘘つき』と表現したのは何故？　それはコイツが少なからず兄のことを知っているからだ。つまり、コイツは兄の知り合いか？　いや待て、早合点するな。あんなに小さな情報なんて今や数万くらいで『買える』。動揺するな。落ち着け。冷静になれ。コイツの言葉を思い出せ。コイツは何と言った？

『キミはキミのお兄ちゃんとは全然似ていない』

そうだ。そう言った。ということつまり、コイツはお兄ちゃんと会ってる？　……ってことは

「……お、お兄ちゃんは、生きて、いるの……………」

声が震えていた。

はつきりと動揺している。この動揺は何の感情から来ているのか。

恐怖じゃない。

驚愕は少しある。だけどそうじゃない。

私は本当に本当に

「さあ？ 俺があいつ キミのお兄ちゃんと会ったのは随分と前だから。今現在生きているのかは知らない」

「そ、そっか……」

嬉しい、んだ。

数年前、唐突にぼくの前から姿を消したお兄ちゃんが生きているかもしれない。そんな曖昧で不確かで小さな可能性を得ただけで、凄く希望が持てている。

はは……、安いな、ぼく。

そう笑おうとしたところで、視界がぐらりと揺れた。横に並ぶ自称上岡くんの顔が遠ざかっていく様子を呆然と眺めていると、強い力で腕が引つ張られた。

「おっと。大丈夫？」

そんな声が近くから聞こえる。

見ると、鼻先十センチという距離に自称上岡くんの少し驚いているような顔があった。

どうやら力が抜けて倒れそうになったところを、自称上岡くんが支えてくれたらしい。自称上岡くんに抱き止められながら、よろよろと立ち上がる。

「す、すみません……」

俯いて顔を隠しながら言う。

……ああ、お兄ちゃんが生きてるかもしれないってわかったくらいで腰を抜かすなんて……物凄く恥ずかしい。

……顔全体が熱い。たぶん今鏡を見たら、耳まで真っ赤で茹でダコみたいに見えるんじゃないかな。……ああ！ そう思うと何だか益々恥ずかしくなってきたっ！！ もう自称上岡くんの顔絶対まともに見れないっ！！

しかし、流石はイケメンと言うべきか、この男はこういう時に限って余計なことをしてくれる。

「どうかした？ あっ、足を痛めたとか？」

一応、心配してくれているのだろう、自称上岡くんが俯いているぼくの顔を覗き込んできた。

「　　っ!」

そっぽを向いてそれを回避する。

「ん?」

覗き込む。

「　　っ!」

回避する。

「　　ん?」

覗き込む。

「　　っ」

回避する。

覗き込む。

回避する。

覗き込む。回避する。

覗き込む。回避する。覗き込む。回避する。覗き込む。回避する。

覗き込む、回避する、覗き込む回避する覗き込む回避する……………
……………。

「何だか、凄い無意味な時間を過ごしたような気がするよ……」

「奇遇ですね。ぼくもです……」

繰り返している内に、互いに意固地になってしまったらしい。たぶん十分くらいは、くるくるくるくるとその場で回っていたんじゃないだろうか。……………何やってんだろ……………ぼく。

こほん、と一つ咳払い。

漫画なんかで話題転換や話の中断などによく遣われるけれど、なるほどこういう時には打って付けた。

「ところで、今更だとは思いますが、ぼくってそんなに嘘を吐くのが下手ですか？」

怪我の巧妙とでも言うべきか、先程までの無駄な時間のお陰で幾分か恥ずかしさが緩和されたので、思い切って訊ねてみた。

正直、兄存命の可能性の次に気になる事実です。

ドキドキと無駄に緊張する。

しかし、そんなぼくを余所に、自称上岡くんはあっさりと頷いてみせた。

「うん。というかアレは最早嘘ですらなかったね。ただ難しそうな言葉を並べ立てただけ、みたいな感じだったよ」

「……………そう、ですか……………」

なんか……物凄くショックだ。……いや、それよりも恥ずかしいっ！ 何か前に「ぼくの人生嘘塗れだ」みたいなこと考えたような覚えがあるしっ。不幸中の幸いは口に出してなかったことか。これがどこかの誰かに知られていたとしたら、ぼくはもう羞恥心で死んでしまえる……っ！

はあ……、自分では上手く吐けたと思っていたのだけど……しかしそうか、難しそうな言葉を並べ立てただけ、か……。

「でも、それがわかったところで、お兄さんの真似は続けるんですよ？」

「まあ……そうですね。兄が生きているのなら、真似をする意味なんて皆無なんですけど。だけど、兄と会うまでは この目で兄を見るまでは、止めませんね」

それが、所謂ゲジメというやつだと思うから。

「ふうん。そっか」

自称上岡くんは薄く笑みを浮かべる。

どこことなく悪戯っぽくて、どこか優しい笑みを。

「ていうか、貴方はぼくの素性をどこまで知っているんですか？」

「それは勿論、キミの知らないところまでだよ」

そう言った彼の顔は、昨日ぼくを笑い飛ばした、あの小憎たらし

い笑顔だった。

そしてそれが、ぼくの見限りで最後の、彼の笑顔となる。

二章：裏の面は絶無（前書き）

登場人物紹介

- ・少年……《無銘》と呼ばれる殺人を生業とする一族の一人。
- ・西牟婁枢……自称《魔女》の二十代女性。緑髪に白衣。
- ・標津川楔……今は亡き、伝説と謳われた刀鍛冶。
- ・相模原伊織……少年の同居人。半径五メートル以内なら、どこに機械があるのかわかる。
- ・蓼科麻琴……ウエイトレスさん。喫茶店でバイトをする、至って普通のギリギリ十代な女性。西牟婁さんとは無関係の一般人。

二章：裏の面は絶無

とある片田舎の一角に存在する、小さな喫茶店。

シツクで落ち着いた、アンティークのような雰囲気を放つ店内のボックス席で、二人の男女は対峙していた。

とは言っても、その男女が睨み合っているわけでもなく、ただ向かい合って座っているだけなのだが。

男は、十七歳くらいの少年。黒のジーンズと、同じく黒いワイシャツに身を包んでおり、目が不自由なのか両目は包帯で覆われている。肌は白く、背丈はやや低い。中性的な顔立ちで、両目を隠しているということも相まって、一見では少年なのか少女なのか判断し難いのだが、その人物は少年と判断して間違いないだろう。

女は、およそ二十代前半と思われる女性。下手をすれば、テレビに映る女性なんかに退けを取らないくらいの美人であるのだが、タイトな黒いスーツの上には何故か白衣を羽織っており、ポニーテールに結われた髪は緑色に染め上げられている。

そんな、端から見れば奇怪この上ない二人組は、しかし特に会話を交わすこともなく、女性はテーブルに所狭しと並べられたいくつもの料理を一心不乱に胃の中に収め、少年はそんな女性を、コーヒーを啜りながら無表情で眺めている。

「……相変わらず、貴方の食欲は凄いですよね。その細身のどこにこれだけの食べ物が収まるのか、本当に不思議ですよ。帰ったら晩ご飯も食べるんでしょう？」

少年は無表情のまま、感嘆するように呆れるようにぼつりと漏らした。

その言葉を耳聴く拾った女性は、料理に伸ばしていた手を止めると、少年の方を見てにやりと笑う。

「ああ、私の可愛い同居人が丹精込めて作った手料理が、な」

挑発するように、あるいは勝ち誇るように　意味ありげに女性は言う。が、しかしそれでも少年は全く無表情を崩すことなく、コーヒーを口に含む。

まあ、口に大量の食べ物を詰め込んでしまっている所為で、大半が言葉として聞き取れず様になっていない為、それで動揺しろというのも、そもそも無理な話だ。

「……まあ、その話はまた後日にしましょう」

「ん？ 逃げるのか？ 臆することも勇むこともない殺人鬼である」と聞く《無銘》もまた、落ちたものだ。殺人鬼だというのにこうして私と会話している、という時点でもおかしい話だが、しかし挑発されて尚殺意を見せないというのは、殺す側の人間としてもどうなのだろうね」

「どうもこうもないですよ。ぼくは　いえ、ぼく達《無銘》と呼ばれる一族が殺人には決まって刃物を愛用する、ということは、当然《魔女》さんなら知っているでしょう？」

「ん？　ああ。まあな」

少年の脈絡のない問いに答えつつ、《魔女》と呼ばれた女性は、《無銘》についての情報を頭の奥から引っぱり出す。

《無銘》 無法と無秩序に塗れた『裏』や『闇』、『業界』と呼ばれる世界でさえも、ごく僅かの人間しかその存在を知る者はいない、そもそもその存在すら疑われるような、一種の都市伝説のような、殺人鬼の血筋を持つ一族。

その一族には、必ず殺人に対する欲求を少なからず持って生まれるといった、殺人鬼の一族としては至極当然なものを除いて、いくつかの特徴があり、その中でも一二を争うくらいに有名なのが、その一族の人間は誰一人として名前や戸籍など、あらゆる個人としての情報を持たないということと、先刻少年が言った、決まって殺人に刃物を愛用する、ということだ。

「その二つの特徴から、お前らの一族は名前の無い刃物 つまり《無銘》と呼ばれていたのだろう？」

「そうらしいです。そして、それと同じように、無感動っていうのも血筋で受け継がれる特徴の一つなんです。無感情ではなく、無感動。故に、ぼく達の殺意は揺らぐことがないし、だから恐怖も揺らぐことはない。《魔女》さん、貴女に抱いたぼくの第一印象は恐怖なんです」

だからぼくは貴女に殺意を抱くことができないんですよ、と少年は肩を竦める。

勿論、無表情で。

「ほう、それは初耳だ」

《魔女》は少年の口から語られた新しい情報に、素直に驚嘆する。

それが事実なら高値で売れるかもしれないな、と頭の片隅で考えながら。

「だが、それを私に喋ってしまつて良かったのか？ 私の戦闘能力が人並み以下だとは言つても、今このナイフでお前を刺すくらいのことではできるし、私は売れる物ならそれがどんな物だろうと躊躇いなく売るぞ？」

「ええ、どちらも別に構いませんよ。殺すことができなくとも、殺されるのを回避することはできますし、知られてもそう不利になる情報でもないです。それに、有利だろうと不利だろうと臆せず勇まらず、殺意の赴くまま自由に殺人する　それがぼく達ですから」

少しも表情を変化させず、しかしどこか誇らしげに少年は言った。

それに対し、今度は《魔女》が肩を竦め、呆れたように嘆息する。

「はん、《無銘》を壊滅させた張本人がよく言うよ。お前ほどあの一族を嫌っていた人間はいないだろうに。……………ホント、お前と話していると、どこからが本当でどこからが嘘なのか分からなくなってくる」

「はは、それがぼくのアイデンティティーですから。　で、そろそろ本題に入りたいんですけど」

と、少年が言ったと同時に、エプロンドレスを身に着けたウェイト

レスが、二人のテーブルの上にある空き皿を回収していく。

「……………」

「……………」

「……………」

無言のまま、少年はウェイトレスが回収していく様子を眺める。

その顔は変わらず無表情を貫いてはいるが、しかしその内心、少年は焦っていた。

今日、この喫茶店を訪れた理由　それは、数年前に生き別れとなった義理の妹にどうも危険が迫っているらしいと、他でもない目の前に座る緑色の髪の《魔女》　西牟婁枢に呼び出されたからだ。

しかし、少年を呼び出した張本人たる枢は一向に本題に入ろうとはせず、それどころか、少年がそのことについて訊ねても無視して料理を食べ続けるという始末。先刻の会話も、一時間かけてようやく成立した初めての会話だった。

通常ならば、馬鹿にされたと憤慨したり、時間の無駄だと早々にその場を立ち去っていたりするのだろう、と少年は思う。

けれど、枢の持ち出してきた情報は義妹の　あるいは存命に関わるものだ。万に一つでもその可能性がある限り、少年はそれを無視するという選択肢を選ぶことができない。それが　それだけが、唯一兄として妹にしてあげられることなのだから。

だから、何としても情報は手に入れなきゃいけない。それこそ最悪、この人を殺してしまっても……。

「どうした？ ナイフを握りしめて。もしや、私を殺そうとも考えているのか？」

シニカルな笑みを浮かべる枢の言葉に、少年はハツとする。

無意識の内、手に取っていたのだろう。少年の右手は、いつの間にか食事用のナイフを握られていた。

銀色に光を反射させる鉄製のナイフを見て、少年は誰にも気付かれないよう僅かだけ口元を歪め、食器を回収していたウェイトレスにナイフを渡す。

「そんなことは考えていませんよ。ただ何となくです。ぼくらは刃物に惹かれやすいらしいですし、それにぼくが愛用するのは『ナイフ』ですから、より一層に惹かれるんだと思いますよ？」

「ふうん？ だがまあ、そうか。お前が本気で私を殺そうと思っていたのなら、お前は腰にあるナイフを取り出すはずだからな」

「ッ！」

そこで少年は初めて、その顔に驚愕という、表立った表情を僅かながらに浮かばせる。

どうしてっ！？

何でっ！？

確かに、少年の腰には軍用ナイフのように武骨で、死神の処刑鎌のように不気味な　今まで多くの人間の鮮血を浴びてきた少年の愛刀《慈愛》が存在する。しかしそれは、少年の後ろ姿を注意深く見たところで気付くことは出来ないよう、細工して収納されているし、そもそも枢は少年の正面に座っていて、少年の背後に立ったことなど一度もない。

あり得ない。

そう、枢がナイフの存在を知っているという事態など、本来ならばあり得ないことなのだ。

しかし、枢は気付いていた　否、『知っていた』。

「何故私が、お前がナイフを持っていることを　もつと言えば、お前のベルトの裏に付けられたホルダーに、伝説の刀鍛冶と謳われる標津川楔の業物　《慈愛》が収まっていることを知っているのか、という顔をしているな。ふははっ、愉快だ愉快！　お前みたいな奴が動揺する姿を見るのは、愉しくて愉しくて仕方がない！　興が乗った。何なら教えてやろうか？」

「……………いえ、いいです……………」

顔を無表情に戻し、少年は首を横に振る。

落ち着け。

少年はそう、自分に言い聞かせる。

相手は西牟婁枢　表と裏、どちらの人間からも畏怖される《魔女》なのだ。彼女を前にして、不可能だなんて言うことがまず不可能だ。あり得ないなんてこそ、あり得ない。どんな事象であれ、理屈を抜きにやって退けてしまうのが、この《魔女》西牟婁枢なのだ。

しかし、それに無理矢理、辻褃合わせのための説明を付けるのならば

「大方、あのウェイトレスの人が合図か何かを遣って伝えたんではない？　貴女が選んだ店ですから、武器の隠し場所を見抜くなんて簡単にやって退けるでしょうし。武器の名前は……まあ、ぼくはと言うより《無銘》という名称は、か　不本意ながら有名になってしまいましたから、その《無銘》が身に着けているナイフ、とくれば九割の確率で《慈愛》だと思うでしょう」

空いているテーブルを拭いている、一人のウェイトレスを指で示しながら、言う。

少年に指を指されたウェイトレスは、変わらずテーブルを拭きながらも聞き耳を立てていたのか、僅かながらその顔に笑顔を浮かべた。

少年の言葉に枢が破顔する。

「ふふつ、まさかまさかこうも易々と見抜かれるとは思ってもよらなかったが、しかし流石は《無銘》と言うべきかな。そう、その通りだ。この襟元に付けた盗聴器で彼女は私達の会話を聞き、そしてお前がナイフを隠し持っているということを私に伝えてくれたのだっ！」

「別に、ぼくだから気付けたってわけでもないですよ。伊織だったら、この店に入った瞬間に気付くと思いますよ」

意気揚々と語る枢に、うんざりといった口調で少年が反論する。
と、『伊織』という名前が出た途端、枢の顔が渋った。

「相模原の小娘か。……まあ、あの機械オタクは例外だろう。いや、寧ろ機械病患者とでも言うべきか？ あいつは本能で機械を感知するからな」

つい先程までのテンションはどこへ行ったのか、苦虫を噛み潰したような顔で言う枢の言葉に、少年は「まあ、そうですね」と頷く。
「アイツは例外です。ともすればくと同じ、人間から失格した存在ですよ」

「……………人間から失格、ねえ」

その意味を噛み締めるかのように、枢は少年の言葉を繰り返す。

「……………だからなのか？」

「へ？」

「だからお前は、妹と会おうとしないのか？」

「ああ……………」と、枢の言葉の意味を理解した少年は、その口調を柔らかいものに変え、答える。

「まあ、概ねその通りです。普通に生活することを願うあの子とは、ぼくみたいな人間から失格した人外、怪物とは、関わりないのが正解なんですよ。ぼくに関わるのは、ぼくみたいな奴だけではないんです」

少年の顔は無表情であるものの、その口調にはある種の好意が込められていた。

それは誰に向けられたものなのか。そんなことは、考えるまでもなく、明白だ。

それは

「ふふっ、ふははっ！」

枢の口から、笑いが漏れる。

しかし、それは今までのような馬鹿にした笑いではなく、少年に対する敬意と、友愛の籠もった　そんな笑い。

「ふははははははっ！！　わかった、いいだろう！　その愚直に歪み切った兄妹愛に免じて情報を売ってやろうっ！！　売値は零だ！　感謝しろよ？　はははっ」

店内に、《魔女》の声が響いた。

二章：裏の面は絶無（後書き）

用語解説

《無銘》……自由を求める殺人鬼の一族。また、《少年》の二つ名。人間のルールに縛られない為に、戸籍や名前などがない。全員が一貫して、武器として刃物を愛用することと、人を殺すだけに人を切ることから、名前の無い刃物　つまり《無銘》と呼ばれるようになったのが源流。個々各々が『自由』に行動する為、縦にも横にも繋がりは無い。

子供が産まれても、大半は子育てに飽きて捨ててしまつか、あるいは殺してしまう為、《無銘》の血縁は少ない。

2：歪な天才（前書き）

登場人物紹介

・少年……《無銘》と呼ばれる殺人を生業とする一族の一人。無表情のまま、楽しげな声で笑ったり溜息を吐いたりできる。

・相模原伊織^{さがみはら いおり}……少年の同居人。極度の機械マニアであり、一部では有名な機械技師。基本的にはいつも笑顔。

・西牟婁^{にしむろ}婁^{かなめ}……自称《魔女》の二十代女性。緑髪で白衣。彼女の周囲では、時折都合を『合わせられた』かのような、あり得ない現象が起こる、と言われる。

2：歪な天才

「お前の妹は命を狙われている。それも、身近な人間からだ。理由はまだ掴めていない　　と言うか、元よりそんなものは無いんじゃないかと思う。あるいは至極個人的な理由から、かもな。どちらにせよ、彼女が危険であることに変わりはないが　　」

少年はソファーに凭れ掛かりぼんやりと天井を見上げたまま、先刻《魔女》から伝え聞いた　　否、売り飛ばされた情報を思い返していた。

「《魔女》の情報が嘘だと言うことは……まず、あり得ない」

確認をするかのように、呟く。

《魔女》　　西牟婁枢は嘘を吐かない。事実を隠匿することはあるが、事実を偽ることはない。それは絶対だと断言できる。情報を売る人間にとって嘘を吐くことは信用を失うことと同義だ。それを行うほど、彼女は浅はかではない。

ただし、それは仕事上においてのみの話だ。

今回の件でも彼女は嘘を吐いていない、とは言い切れない。今回、売値は零だった。つまりは無償。あの《魔女》が金にならない行動を『仕事』とするのかは、果たして少年にはわからない。

真実である可能性もあるし、偽りである可能性もある。

「ただ、まあ……」

少年は呟く。

どちらにせよ受け入れる他ない、と。

枢から情報を買った時　いや、少年が喫茶店を訪れた時だろうか　その時から少年の選べる選択肢は一つしかなかった。

真実にしろ偽りにしろ、結局のところ、枢の言葉を信じるしかないのだ。

ならば、真実だの偽りだの悩むことなど無意味だ。時間の無駄以外の何物でもない。真に悩むべきは、どのようにして義妹を守るのか、だ。

少年が思考を切り替えたそのタイミングで、チャイムがなった。「たっだいま」と、玄関先から陽気な声がドアを開閉する音と共に少年の耳に届く。

もうそんな時間だったわけ？　と少年は首を傾げる。見ると、時計の針は既に七時を回っていた。

トン、トン、トン、と軽快なリズムで近付いてくる足音に、少年はゆっくりと顔を向ける。

肩口に切り揃えられた栗色の髪。白い半袖のブラウスと、襟元に結ばれた赤いリボン。膝よりも少しばかり上に裾がある、やや丈の短い紺のスカート。そして何より、華が咲いたと言うよりも花火が

開いたと比喻した方がしっくりくるだろう晴れやかな笑顔。

そこにいたのは少年の同居人、少年の住まう部屋の本来の持ち主である少女　相模原伊織だった。

「ただいまっ!!」

廊下とリビングの境目に立ち、何故か二度目の帰宅通告をしてくる伊織。

少年は特に微笑み返すこともなく、いつも通りの無表情で「おかえり」と答える。しかし、それで何か満足したらしい伊織は、うん、と二回頷くと、

「では、着替えてくるとするよ!」

そう言って踵を返した。

はあ、と少年は溜息を吐く。

別に不満があるわけではない。ただ、男である自分に向かって堂々と『着替え』なんて言葉を口にするのはどうなのかと、少年は思う。

彼女の警戒心が薄いのか、それとも少年が警戒するに値しないと評価されているのか。

かれこれ同じ部屋での共同生活を始めて半年以上は経過しており、その間も一切の問題無く過ごしているのだから、警戒心が薄まって当然と言えば当然なのかもしれない。しかし、どうにも初日からこ

んな感じではなかったか、という疑念が少年に無いではない。

「……………。まあ、ぼくが彼女に手を出すなんて事は、一切合切あり得ないからいいんだけどさ……………」

だが、釈然としないのもまた事実だった。

「と、さてさてそろそろ晩ご飯を作りますか」

少年はソファから腰を上げる。

いつまでも自身の男としての尊厳なんて思考している場合ではない。もしくは場面ではない。

体の深部に浸透させるかのようにそんなこと思考しつつ、少年はキッチンへと移動する。

料理は少年の担当だ。

と言うより、家事全般を少年が担当していると言ってもいい。それは、居候であるが故の僅かな後ろめたさ、みたいなものが主因でもあるが、しかしそれ以前に伊織は家事全般ができない。元より、彼女にはやろうという気がない。

三週間ほど前の話だ。

少年が《魔女》からの依頼で三日ほど東北の片田舎まで行ってきたその後日、帰ってくると部屋の中は荒れに荒れていた。

足の踏み場なんてない。

生きていける場所であるのかすら怪しい。

棚、机、押し入れの中に締まっていた物がすべて床に散乱し、キッチンには腐った水が溜まっており、キッチンの生ゴミと共に吐き気を催しそうなほどの異臭を放っていた。

そんな地獄にも似た一室で、伊織は一人、壊れたテレビをいじくっていた。

どうして掃除をしないのかと少年が訊ねれば、「する必要性が解らないからだよ」と一言。

以来、少年は伊織に関しての家事能力の一切を諦めたのだった。

壁に掛かっているエプロンを身に付ける。

全体的に緑色を基調とした、胸の辺りにカエルみたいなマスコットがプリントされた簡素なエプロン。プレゼントだと言って、一週間前に唐突に伊織が買ってきたのだが……、

うん。いつもながらに絶妙に微妙なデザインです。はい。

カエルのくせに八頭身なのは、一体どういう見なのだろうか。不気味なことこの上ない。

「さてさてまずは……っと」

眩きながら、少年は戸棚からまな板を取り出す。そのついでに、同居人にアンケートを聴取することも忘れない。

「今日、何食べたい？ 何でもってわけにはいかないけど、今朝、買い出しに行ってきたから突拍子もないヤツ以外なら一応対応できると思うよ」

ドア一枚を隔てて着替えているであろう伊織に問い掛ける。

キッチンから脱衣場まではそこまで離れていないが、しかし通常の音量が平均以下だと評される自分の声でも届くのだろうか？ と少年は一瞬だけ疑問に感じたが一応は聞こえたらしい。伊織はしばらく「うゝん」と悩んだ後（少年の耳にはつきりと届くほどの音量で唸っていた）、パンツと勢いよく洗面所のドアをスライドさせ、私服姿で登場すると、

「じゃあ、炒飯っ！！」

と、叫んだ。

爛々と。

瞳を輝かせ。

「……………」

まあ、うん。予想は、出来てたよ？

薄々、若干、雀の涙くらいは。

疑いなんて物は微塵も混ざっていない、まっすぐと向けられた伊織の眼に、少年は無意識の内に顔を反らす。

「炒飯って……、昨日も食べたでしょ」

「いいじゃないっ。炒飯だよ、炒飯。おいしいじゃないっ。あたしは毎日炒飯でも生きていけるよ！ いや、寧ろ毎食食べないと死んじゃうねっ！！」

「……………そっすか」

呆れ返った少年は溜息を溢す。

こいつの炒飯への愛は、既に中毒の域にまで達しているのではないだろうか、と本気で思う。

「……………まあ、いいけどね……………」

「やったーっ。じゃあ、よろしく頼むよ、シェフ」

少年の呟きを違った意味に解釈してリビングに移動する伊織。少年はもはや否定する気にもなれない。伊織を見送ってから、冷蔵庫の野菜室を開ける。

「あ、そう言えば今日、街で西牟婁さんに遇ったよー」

ソファーに腰掛け、テレビのチャンネルを次々に変えていく伊織が思い出したように言った。

「へえ」

冷蔵庫から野菜を取出し、少年は返事をする。

あの喫茶店からの帰りだったのだろうが、しかしあんな人が街を往来している光景はさぞかし不気味だったことだろう。少年には想像が及ばない。

「それは君が言えることじゃないと、あたしは思うよ」

「……む」

確かにそうだ、と少年は思う。

ワイシャツとズボン、その両方が真っ黒で、その上両目を包帯で覆っている人間が平日の往来を歩いているという光景もまた、周囲から見れば異質であることは確かだ。

「変人度で言えば西牟婁さんと君、同じくらいだねっ」

「……いや、ぼくが変人なのは認めるけどさ。でも、西牟婁さんと同じなのはちょっと心外だよ」

意気揚々と笑う伊織に、少年はムツとした声音で意を唱える。

あの《魔女》と同格な存在など、世界の全てを捜し回ったところで一人いるかどうかすらも怪しい。

「そもそも、伊織に変人度がどうか言われたくない」

「ええ、酷いー。あたしは至ってフツーの女子高生だよ」

「よくそんなことが言えるよね。ぼくみたいな殺人鬼と平然と暮らしてゐるくせに。正直に言えば、今まで一度だって伊織をまともだと思つたことはないよ」

「まっ たまたま、君はホントに嘘つきだねえ」

次々と告げられる少年の辛辣な言葉に、少女は快闊に笑う　笑
い続ける。

その光景だけを見るのなら、それは無愛想な男と天真爛漫な女の甘い一時の様にも取れるが、しかしその会話の内容は男の皮肉を女が受け流し続けるといった、実に歪な　その場に広がる光景とは相反するものであり、そしてそれら二つの事柄が二人の関係を表していると言えるだろう。

「で」

と、伊織が話を切り替える。

「君の『左腕』と『視界』の調子はどう？」

相変わらずの笑顔。しかしどこか真剣味を帯びた伊織の声に、少年は自然と服の下にあるであろう左腕の『繋ぎ目』の部分を視界に映す。

「うん。まあ、調子は良いよ。ただ……」

「ただ？」

「ほんのちょっとだけど、重いんだよね。普通に生活する分には何の問題もないくらいに僅かな差なんだけど、仕事をするとなるとやっぱり問題が出てくる。バランスが上手く取れないんだよね」

「ん〜、それは自分で何とかして貰うしかないね。いくらあたしの造った『腕』でもそればかりはどうしようもないよ。どんなに見た目、質感が本物にそっくりでも、その正体は精密機械なんだから重くなるのは当然なんだよ」

「ふーん、そういうもんなんだ」

呟くと、少年は一旦料理の手を止めて目の高さまで両手を持ち上げ、しげしげと観察する。

右手と左手、並べてみても全くと言っていいほど違和感がない。

まるで義手とは思えないよね。

マネキンの腕などとはわけが違う。

関節や掌にある皺の形から光の反射のさせ方まで、何一つとして全く同一。『違い』というものを一切切排除したかのような、右腕がもう一本存在しているかのような精巧な人形の腕。

着けている本人である少年ですら、その手にナイフを握らない限り、それが自分の身体でないことを忘れ去ってしまうほど鮮麗された義手。

「そうゆーもんだよ。じゃあ、『視界』の方は？ 見えない部分と

かない？」

伊織の問いに、少年は『視界』を自分の手から外すと前、右、左、背後と切り替えていく。

それはさながら、テレビのチャンネルをリモコンで替えていくように。

一通り自身の『視界』を隅々まで眺め終えた少年は、再び『視界』を前に戻す。

「それに関しては特に何も。よく出来てる、としか言えないね。元のよりもよく見えるくらいだし」

「それは当然だね。あたしを誰だと、君は思っているんだい？ ……ま、良好ならいいんだよ。重畳、重畳っ！ けど、くれぐれも磁気の強い所、湿気の多い場所には近付かないでよ？ 精密機械の性能は抜群にいいけど、精密ってことはつまりそれだけ弱点も多いってことなんだから」

「每晚毎晩、口を酸っぱくしてまで言わなくてもわかってるよ……」

溜息を吐くように呟いて、少年は料理を再開させた。

3：血塗れの（前書き）

登場人物紹介

- ・少年……《無銘》と呼ばれる殺人を生業とする一族の一人。
しょうねん
- ・能代凌……正体不明、年齢不詳の人物。男なのか女なのかさえ不明。
のしろしの
- ・西牟婁枢……自称《魔女》の二十代女性。緑髪に白衣。
にしむろ かなめ
- ・相模原伊織……少年の同居人。
さがみはら いおり

3：血塗れの

少年には左腕と両目が存在しない。

彼の左腕は二の腕の中間辺りから途絶えており、包帯の下に隠れた、本来ならば眼球が収まっているはずの場所は空洞になっている。

普通の人間ならば、ただ生きることさえも困難になるほどの致命的な欠陥だろう。しかし、少年はそれが些末事であるかのように、平然と生活することができている。

それには相模原伊織に出会えた、という幸運も少なからず作用しているはずだ。彼女と出会うことができなければ、少年は未だ視界も左腕も失ったままだった。

しかし、それ以上　とは言わないまでも、それと同等なくらいに彼の特殊な生い立ちもまた、作用していると言えるだろう。

少年の生まれ育った家庭は、特殊だった。歪だった、と言い換えてもいい。

『自由』に固執し執着するあまり、名前や戸籍を棄て、人間であることさえ棄てた、さながら非合法の塊のような　代々殺人を生業とする家系。

その一端に当たる家庭に生まれた少年は、当然、そうあるべくして育てられた。

両足で立って自由に動き回れるようになれば、生物の生命を停止

させる方法をその身体に徹底的に教え込まれ、物事を知識として覚えられるようになれば、『自由』について気が狂いそうになるほど頭に叩き込まれた。

休む暇など無かった。

そんなものは与えられなかったし、そもそも彼自身、そんなものがあることを知らなかった。

その頃の彼の情報と言えば、それは彼の両親にとって都合のいいものばかりしかなかったからだ。

学校なんてものは知らない。

友人なんてものも知らない。

なにより 『自由』というものを、少年は知らなかった。

両親の言葉に就き従い、ただただその通りに物事をこなしていくだけ。

そんな日々に、少年は疑問も不満も抱くことはなかった。

当然だ。そうであるように造られたのだ。

寧ろ、そうでなくては困る。

と、彼の両親ならば言うだろう。

彼らにとって少年は体のいい道具であり、自分達の『自由』に対する生け贄だった。

彼らがそれを疑うことはなかったし、少年もまた、特に否定はしなかった。

そう、少年は否定しなかった。

ただ、それだけ。

しかし、その事実が後に起こる《無銘》と呼ばれていた一族の壊滅に繋がり、そして少年が左腕と両目を失う結果に繋がったと言えるだろう。

××××××××××××××××

不意に、ズボンのポケットが震えた。

ポケットの中から携帯電話を取り出すと、少年はろくに相手を確認しないまま耳にあてる。

『よう。久しぶりだな』

受話器越しに聞こえてきたのは、やや低い、青年のような声だった。

『久しぶり』？

電話の声に心当たりはない。少年は不信感を心中に抱き首を傾げるが、しかしややあって、ある一人の人物に思い至った。

「ああ、能代か……」

ようやく合点がいったように呟くと、少年は相手の姿を脳裏に思い浮かべながら、溜息を吐く。

能代 能代凌。

少年にとって、天敵とも唯一の理解者とも言える人間。

似過ぎるくらいに自身と似ていて、しかしその実、あまりにも違い過ぎる対極の存在。

「君の声はどんな声色でも不快だね。もう二度と聞きたくなかったんだけど。どうしたの？ 高層マンションの屋上から紐無しバンジーでもしたくなった？ それなら、景気付けに背中を押してあげてもいいよ」

少年にしては珍しく、敵意を隠そうともしない乱暴な口調で言葉を吐き捨てる。それに対し、能代は軽快な笑い声を上げる。

『おいおい、高層マンションの屋上は普通立ち入り禁止だぜ？ お前に嫌がらせしようと思っていたんだが………いやまあ、世の中そうそう上手くはいかねえよな。お陰でこっちまで苛々してきた。どうしてくれんだよ、おい』

「しらないよ。ってか暇だよ、君。何？ 仕事辞めてニートにで

もなつたの？ それならお祝いしなきゃだね。いつ辞めたの？ 教えてよ。その日、記念日にするから」

『バカか？ お前。辞めてねえよ、ってか辞めるかよ。どっちかつてつたら、お前の勝手に妄想を飛躍させる癖を止めた方が、俺はいいと思うけどな。普通にしてたって気狂いにしか見えねえってのに、そんな気違い擬いの言動までするなんて社会的に終わってるな。俺だったら自殺してるぜ。お前どうしてまだ生きてるんだ？』

「どうしてって、そりゃ君への嫌がらせに他ならないよ。ぼくが生きてることに対して君が苛々している様子を思い浮べると物凄く娛しいね。ああ、そうだよ。ぼくには妄想を飛躍させる癖があるみたいだ。でも、仕方ないよ。だって、君が未だに生き汚く生に絶り付いているんだからさ。君が死んでくれさえすれば、ぼくの妄想癖も治るっていうのに。ねえ、早く死んでくれない？」

『はっ、責任転嫁かよ。嫌だ嫌だ。嫌だね、最近の若者は。そもそも、俺はお前と会話なんてしたくないんだよ。どこの誰が自分とそっくりな思考回路のヤツと話したいと思うかよ。勝手に会話を広げるな』

「じゃあ、何で電話なんてしてくるのさ。君が電話なんて掛けてこなければ、お互いに心中穏やかに過ごせたってのにさ。言動と行動が矛盾してるよ」

『矛盾？ 当たり前じゃねえか。まさかお前、自分には矛盾がないなんて思ってたねえよな？ 思ってたんならそれは間違いだ。人間、誰しも矛盾を抱えてる。人間は単純なくせに複雑を内包しようとするからな。矛盾だらけだ。それに例外なんてねえよ』

「あゝ、はいはい。そうですね。君の人間論なんて聞きたくないし、君の声も聞きたくないからとつとと用件だけを言つてよ。電話代が勿体ない」

『へえ！ 俺の用件を聞くんだった？ 実のところ、相手が俺だとわかつた時点で電話を切る、と俺は踏んでたんだがね。何？ これが所謂ツンデレってヤツ？』

「気色悪いことを言わないでよ。確かにツンはあるかもしれないけど、デレはまったく皆無だよ。それにツンにしたって、二割程度しかない。ぼくが君に向けている感情のほとんどは殺意だよ」

『へへっ、そいつは恐悦至極！ 嬉し過ぎて嬉し過ぎて、お前の妹を殺したくなってきたぜっ！！』

「……………は？」

完全に不意を突かれた少年は、隠すことも出来ずに動揺を露見させる。

しまった……………ッ！

直ぐ様自身が失態したことに気付くが、すでに遅い。受話器の奥から木霊する笑い声に、少年は憎々しげに顔をしかめる。

『ハハッ、まさかまさかつ！！ 残虐非道にして冷血動物の《無銘》様に、そんな人間らしい弱点があるなんてなあ！ しかも、それが妹！ あの《魔女》から聞いた時は、正直疑い半分だったんだが……………ひひっ、世に言う殺人鬼の正体はただのシスコンだった、なんて面白過ぎだ！！ 俺を笑い死にさせる気かあ！？』

「……………」

少年は答えない。

今更何かを言ったところで、電話の向こうにいる相手には何の意味もなさないだろう。それを悟っているが故に、少年は何も語らない。

チツ、と舌打ちのような音がスピーカーを通して聞こえてくる。

『……だんまりかよ。まあ、いいさ。真偽が確かめられただけでも重畳だ。だが、いいか？ 俺はお前という嘘つきが、お前という俺自身が、お前という存在が 存在していることに対して、俺は自分でも異常だと思つくらいにまで苛立ちを憶えている。今までにないくらいにまでの殺意を抱いている。しかしだからと言って、俺にお前を上回るほどの殺人技術はない。代理人であるこの俺に、殺人鬼であるお前は殺せるはずがないからな』

その声に抑揚はない。

無理矢理感情を抑え込んでいるのか、少年の耳に届く声は無味乾燥としている。

それはまるで

まるで、ぼくみたいな声だな。

怒りも憎しみも恨みも妬みも押し隠して、一切の凹凸を無くした感情の無い声色は、まさに少年を体現しているようだった。

『だから、俺はお前に自殺を強要する。お前が生きる意思を無くすまで、お前の生きる意味を無くすまで、嫌がらせをしてやる。如何に人間らしい部分があるうと、どれだけ偽善に振る舞おうと、俺はお前の平穩を殺す。それを　よく憶えておけ』

通話が切れる。

ツー、ツー、と回線が切れていることを伝えてくる電子音に耳を傾けつつ、少年は小さく苦笑を浮かべた。

「まったく……、君は一体どこまでばくに似ているんだよ」

3：血塗れの（後書き）

謝辞

随分と日を空けてしまい、申し訳ありませんでした。

皆様が貴重な時間を割いて読んでくださっているというのに、自分程度の人間が生意気にも投稿を先延ばしにするなんて、本当に下げた頭が上がりません。

未だ未熟故、こういうことがこれからも起こりうると思います
が、それに懲りることなく、私の拙い文章を読んで頂けるのなら、
とてもありがたいです。

本当に本当に、申し訳ありませんでした。

4：終わり、改め……（前書き）

登場人物紹介

- ・少年……《無銘》と呼ばれる殺人を生業とする一族の一人。
しょうねん
- ・能代凌……正体不明、年齢不詳の人物。男なのか女なのかさえ不明。
のしろしの
- ・西牟婁枢……自称《魔女》の二十代女性。緑髪に白衣。
にしむろ かなめ
- ・相模原伊織……少年の同居人。
さがみはら いおり

4：終わり、改め……

時刻にして午後八時。

少年と能代との受話器越しの会話が終わって三時間弱、テーブルを挟んだ向かいに座る伊織に、少年が苛々とした口調ながらも簡潔にその内容を話すと、

「へえ、能代くんからそんな電話があつたんだあ」

と、炒飯を蓮華で掬いながら、楽しそうな笑みを浮かべた。

一体、何が楽しいんだろうか。

こっちはこんなにも苛立っているっていうのに、と少年は伊織の態度に僅かばかりの不満を抱く。が、直ぐ様それが伊織の『通常』であつたことを思い出した。

共感を得られなかったくらいで……。

少年は自らに呆れ、それから、自分も案外人間を捨て切れていないな、と可笑しさが込み上げた。

「まあ、ね」

どこか照れたような声で、少年は答える。

「で、そこで相談なんだけど。どうやったら、『あの子』を守れると思う？」

「どうやって、かあ……」

伊織は蓮華を口にくわえると、腕を組んで頭を悩ませているような仕草をとる。そのポーズは、心なしかどこか怒っているようにも見えた。

「　　っていかそそも、何で妹さんなの？　能代くんは『お前の平穩を殺す』って言ってただけで、具体的には何も言ってなかったんでしょ？　だったら、能代くんが何をするのかわからないと、あたしは思っんだよ」

「ぼくとアイツとの会話を聞いていないはずの伊織の物真似が異常に上手いことは、置いておくとして　まあ、アイツが考えそうなことは大体予想がつく……というか、わかるんだよ。不愉快なことに」

言っと、少年はコップに並々と注がれた水を一気に呷る。空になったコップを少年がテーブルに置くと、ドンツ、と大きな音がリビングに響いた。

「アイツは短絡的だから、ぼくの身近な人間を殺そうと考えると思う。で、ぼくの身近な人間って言えば、伊織と《魔女》さん、それと《あの子》くらいしかない」

「なんか寂しい人間関係だね」

伊織の笑みが、仕返しに悪戯をする子供が浮かべるような、含みのある笑みに変わる。

しかし、そのことに気付いているのか、それとも敢えて無視して

いるのか、少年はやはり顔色を変えずに嘆息する。

「まあ、仕方がないと言えば仕方がないよ。何せ、ぼくの関わる相手のほとんどが、仕事の依頼主か、その対象だからね。深く関わることが、無いんだよね」

依頼主は　　おおよそ、必要以上の情報の漏洩を恐れているのだろう　　仕事の内容以外は話そうとはしないし、仕事の対象とはそもそも会話が成立しない。成立したとしても、数回の問答があるだけであり、それも片手の指で数えられる程度の人数としか交したことがない。それに、結局は相手がいなくなるのだから、少年との関係が進展することはあり得ない。

確かに寂しい人間関係だな、と思う半面、これで十分じゃないか、とも少年は思う。少年にとって、知り合いが三人　と、一人もいるという事実は、奇跡に近かった。

「まあ、そんな知り合いの少ないぼくの知り合いの中で、アイツが狙う人間と言え、そりゃ《あの子》しかないでしょ。アイツが伊織を狙うわけがないし、あの《魔女》と敵対することは、そもそも考えもしないと思う。アイツも馬鹿じゃないからね」

「　ふうん、そつか。言われてみれば、うん、確かにそうかも」

伊織は何故か嬉しそうに、うんうんとやはり二度頷き、それから「でも……」と眉根を寄せむっとした表情に変わると、

「西牟婁さんのことを、《魔女》だなんて呼んじゃダメだよ」

そう言って、少年に向かって人差し指を突き立てた。

ああ……。

少年は額を押さえた衝動に駆られるが、それをぐっと堪えて無表情に努める。

伊織は昔、あの《魔女》に助けてもらったことがあり、その所為か彼女のことをどこか神聖視していて、彼女の悪口を言ったり彼女のことを《魔女》と呼んだりすると、トレードマークとも言える笑顔を消して怒り、酷いときは口さえも開かなくなる。

いい加減、そこらへんの考えを改めさせなきゃいけないな、と思いつつも、しかしどこか強気にいけず、少年は伊織から視線を逸らして言い訳めいたことを口にする。

「……いや、でもさ、あの人自分から《魔女》だって名乗るよ？」

あの人物は普通に名前を呼ばれた時よりも、《魔女》と呼ばれた時の方が、若干だが嬉しそうだ。少なくとも、少年にはそう見える。

しかし、それで納得する伊織ではない。

伊織は炒飯を食べる手までも止め、その言に熱を込める。

「それでも、だよ。《魔女》なんて、凡そ人間に付けるあだ名じゃないよ。最早、『魔女』なんて単語は差別用語に近いんじゃないかな」

彼の有名な国民的アニメーション映画でも、《魔女》って呼ばれる人は嫌われ者ばかりなんだよ、と語る伊織に、少年はまったく面

倒だ、とばかりに深々と溜め息を吐く。

「伊織のその意見こそ、ぼくは差別だと思うよ。まあ、言葉に差別という概念があるかどうかは知らないけどさ」

少年はそう言って椅子から腰を上げ、会話を切る。キッチンの流し台へ行き、空のコップに水道水を注いで戻ってくると、

「伊織は何か方法は思い浮かぶ？」

と、話を戻した。

「方法って、妹ちゃんの？」

間を置いたことでクールダウンしたのだろう、いつも通りの明るすぎる笑顔に戻った伊織が、炒飯を咀嚼して首を傾げる。

「うん。まあ、家にいる時は大抵西牟婁さんと一緒だから、ぼくが聞きたいのは学校に侵入する方法、なんだけど」

「んん、学校に侵入かぁ」

再び、伊織が腕を組む。

「やっぱり、制服を着て生徒として侵入するのが王道なんじゃないかな。木は森の中、だよ」

「いや、でもさ……」

伊織の考えに、しかし少年は何か思うところがあるのか、言葉を

探すように目を泳がせ、それから「でもさ」と繰り返した。

「……でも、その肝心の制服がないでしょ」

「確かにここにはないけど、でもネット通販とかでなら買えるよ？」

「そういうのって、届くまで時間が掛かるんじゃないの？」

少年はインターネットに関しては詳しくはないが、しかし注文した当日には届かない、ということくらいは判断つく。

「ぼくとしては、明日からでも《あの子》のこと、見守りたいんだよ」

「んー、そう言われてもねえ。　　っていうか、案外キミ、シスコなんだね」

クスクスと可笑しそうに笑う伊織に、少年は首を傾げる。

「そう言えば『しすこん』って何なわけ？　　アイツもそんなこと言ってたけど」

「シスターコンプレックスの略だよ。マザコンのシスターバージュンかな。姉や妹を異常に愛してる人のことだね。ホントは姉や妹を異性として見ている人のことを差すんだけど、キミみたいに溺愛してる人のことも言うんだよ」

少年に対して上から何か言えるのが嬉しいのか、こんなの常識だ、とばかりに胸を反らす伊織。

少年はテーブルに肘を突き、感心するような声を漏らす。

「『愛』なんて……よくまあ、恥ずかしげもなく言えるよね。スゴいよ。ぼくだったら絶対に言えない」

「そうかな？ それはキミが必要以上に意識してるからなんじゃないのかな」

「かな？ ……まあ、いいや。『愛』なんて単語、ぼくからは一番遠いものだしね」

「どうして？」

「だって、ぼくは誰からもそういう感情を向けられたことがないし。それにぼく自身、誰かに対してそういう感情を持ったことがないから」

当然のことのように言う少年に、伊織は笑顔のまま少しだけ目を見開く。

「？ 妹さんは？」

「確かに、『あの子』を好ましくは思うけど、『あの子』がいなくて今のぼくはいなかったとは思うけど、でも妹としても他人としても、一度だって『あの子』のことをあいし、……うん……愛したことはないよ。あの子を守るのも、ただの兄としての義務だからだよ」

少年の辛辣な言葉に、伊織は何を思ったのか「ふーん」とだけ声を出し、炒飯を口に運んだ。

「ま、そんなことどうでもいいんだけど」

と、少年。

「変装以外で何かいい案ない？」

再三にわたり、少年は伊織にその問いを持ちかけると、今度は悩む素振りもせず、「ないね」と断言した。

「キミの妹ちゃんが通ってる学校って私立の進学校でしょ？ そういうのって結構侵入しにくいんだよ。潜入、変わり身みたいな裏方が主流の能代くんならまだしも、そういった経験がない、力ずくで突き進むタイプのキミには不可能に近いね。それに、そんな明らかに不審者な格好じゃ、もう捕まりに行っているようなものだ、あたしは思うよ」

「むう……」

ぐうの音も出ない。

少年自身、わかっていたことなのだが、それを改めて言われてしまったては返す言葉もない。炒飯を食べ終え、お皿と蓮華を流し台に持っていく伊織を背中に、少年は深く深く溜息を吐いた。

「……やっぱり、強行突破しかないのかな……。でも、それだとうしてもこっちが後手になっちゃうんだよね」

「仕方がないんだよ。そもそも、妹ちゃんとの接触を避けてるのに、それでも先手を取ろうとするのが間違ってるんだよ。キミはマンガ

のヒーローのように、妹ちゃんがピンチの時に颯爽と現れればそれでいいんだよ」

「ヒーロー……ねえ……。柄じゃないんだけど」

まだ納得がいかないように、少年は呟く。

どちらかと言えば、自分はヒールだ。

「それなら、変装する?」

「……………制服、あるの?」

「西牟婁さんなら、きっとなんとかしてくれるんじゃないかな?」

「あの人かあ……………」

これ以上借りを作るの、嫌だなあ、と溢し、少年は携帯電話を手を取った。

章節：幕間1・義妹の独白（前書き）

登場人物紹介

- ・義妹……いもうと《無銘》と呼ばれる一族の家に拾われた少女。
- ・お兄ちゃん《おにいちゃん》……《無銘》と呼ばれる一族に生まれた少年。

章節：幕間1・義妹の独白

私のお兄ちゃんは嘘つきだ。

それに気付いたのは、一体いつだっただろう。

たぶん、あの家に住んで一年くらい経った頃だったと思う。

最初は、お兄ちゃんの言葉は全部本当なんだと思っていた。お兄ちゃんの口から語られる様々な武勇伝は、その全てがとても輝かしくてきらびやかで眩しくて、このお兄ちゃんは凄いんだと、子供ながらにとっても誇らしかった。

でも、次第にそれがどんなに荒唐無稽なことなのか、どんなにあり得ないことなのか気付いていって、そして段々と、お兄ちゃんの嘘を吐くタイミングとか仕草とかがわかるようになっていった。

だから、

「ここでするのはいやだし、ひとも　ころしたくはないよ」

この言葉も、

「だから、おにいちゃんはどこにもいかないでね。ちゃんとちゃんとあたしのそばにいてね」

「うん、わかった。やくそく」

この約束も、嘘なのだと気付いてはいた。

だけど、いつもと同じように、気付いていないフリをした。

気付いていると気付かれてしまったら、お兄ちゃんに嫌われてしまふと思ったから。

「じゃあ、おやすみ、おにいちゃん」

「うん、おやすみ」

そう答えて、部屋から出ていくお兄ちゃんの背中に、私は小さく呟いた。

「……さようなら、おにいちゃん……」

お兄ちゃんはどこかに行ってしまう。

それは予感というよりも、確信だった。

わかつたと、やくそくだと頷いた時、お兄ちゃんは嘘を吐いていた。だから、私がお兄ちゃんと顔を合わせることは二度とないのだろつと、確信していたのだ。

その翌日、やはりお兄ちゃんの家にはおらず、その代わりに、リビングにはお父さんとお母さんの肉塊が転がっていた。

章節：幕間2・裏の裏は白濁（前書き）

登場人物紹介

・男^{おとこ}……日本刀を扱う。

・子供^{こども}……ナイフを扱う。男と何らかの因縁がある様子。

・標津川^{しへつがわ}袂^{みそぎ}……今は亡き、伝説と謳われる《刀鍛冶》。その作品には《慈愛》や《悲哀》などがある。

・能代^{のしろ}凌^{しの}……正体不明、年齢不詳の人物。男なのか女なのかさえ不明。

・西牟婁^{にしむろ}柩^{かなめ}……自称《魔女》の二十代女性。緑髪に白衣。

完全版です。長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

章節：幕間2・裏の裏は白濁

月明かりが辺りを照らす。いや、月光だけが灯りとして機能している、と言っべきか、暗がりには沈んだままの路地は、その存在を忘れ去られてしまっているかのようにどこまでも平静を保っていた。

人は一人だつて通らない。

まさに絶好の場所だつた。

男は灰色をした高層ビルの壁に背を預け、眠るかのように目蓋を閉じる。

思い起こすのは八年も前の出来事。身体に深く深く刻み込まれた、忘れようとさえ思えなかった恥辱の記憶。

あれは、夏のただ中であるにしてはやけに涼しい夜だつた。あるいは、寒いと感じる人間もいたのかもしれない。『遊び』に出掛けたその帰り、近道である路地裏を歩いていた男の前にそれは唐突に現れた。

小学校中学年あたりの、性別の判断しにくい顔立ちをした子供。シャツ、ズボン、靴の全てを黒で統一させた格好で、線が細く、背丈は男の肩の高さにも達していない。

目の前に立つその人物は、どこからどう見ても普通の子供だった。

ただ、能面に二つだけある瞳に殺意をたぎらせていることと、左腕が無いことを除けばの話だが。

「お前……………何だ……………」

男がドスの利いた声で問い掛ける。

「……………」

子供は答えない。

ゆつくりとした、しかし一分の無駄もない動作で右腕を腰の後ろに回すと、刃渡り三十センチほどのナイフを取り出し、構えた。

「チッ」

舌打ちをする。

殺意を向けられたことに対してではない。そんなことは彼にとつてすれば日常茶飯事であつたし、子供に刃物を向けられたところで彼には脅威でも何でもない。

だが、子供の持っているナイフ あれには、覚えがあつた。

子供の小さな手には不釣り合いな、禍々しい形をしたナイフ。

それは《慈愛》と呼ばれる、生涯を『刀鍛冶』として貫いた標津川楔が造った、唯一刀ではない獲物。それ故に、その精度は他の標

津川禊の作品など足下にも及ばず、姉妹作である名刀《悲哀》ですらその強度には敵わない。

どうして一介の子供がそんな物を……、と男は思ったが、直ぐ様それを否定する。そんな物を所持しているヤツが一介の子供であるわけがない。

男の双眼が真剣味を帯びる。

先刻『遊び』に使ったままの、赤い液体にまみれた抜き身の日本刀を握り込むと、男は自身を見据える子供を睨み返した。

子供は眉一つ動かさない。ただ、少しだけ腰を落とし、前傾姿勢になる。

その姿に、男は既視感を覚えた。

脳裏に霞む記憶の断片に顔をしかめる。

「俺は……、お前を知っている？」

「でしょうね」

途端、子供の身体が跳ねた。

五メートルほど離れた距離を跳躍するだけで詰めると、《慈愛》を右上から喉元へと振り下ろしてくる。

それを、男は下段から上段へと振り上げた刀で弾いた。

キン、と響く日本刀とナイフの衝突音。

「　　っ」

力に負けて弾かれた子供は、その反動を利用して後方に跳ぶと、空中で身体を一回転させるといふ曲芸染みた動きを器用にこなして地面に着地した。

ふ、と息を吐く。

「お前、何だ？」

「……別に。ただ、貴方と同じってだけのモノですよ」

「へえ、道理で」

人間離れしてるわけだ、と彼が言い、そこで会話は早くも終焉を迎えた。

静寂が辺りを包む。

男は右手のみで握っていた日本刀の柄を両手で握って構え、前方を見据える。

その瞳には、怒気や真剣味といった邪魔なモノが一切として混じっていない。あるのは『殺したい』という欲望さえ入る余地のない、ただ『人を殺す』という快楽だけを求める殺意。

「およそ人間の発するモノじゃないですね」

子供はそう眩き、男の殺意に応えるかのように《慈愛》を逆手に持ち換え、構え直す。

「

」

男は無言のまま、左足を後ろに引く。

子供の言い分は、彼自身、その通りだと思う。

確かに自分は人間じゃない。

いつもの、殺人の『過程』を目的としていた自分ならいざ知らず、殺人の『結果』を目的とする今の自分は、ヒトガタをした化物だ。殺人を趣向する鬼だ。

しかし、だからこそ男は口をきくわけにはいかない。

自身の意思を語る、という行為は人間にのみ許された特権だ。自身を化物だと、人間ではないと主張するのなら、言葉を発することなど赦されない。化物であるのなら、その風貌、動向で自身が異形のモノであることを証明しなければならない。

それに何より、本気の殺し合いに言葉を交わすことなど余分だ。

男が地面を蹴る。

同時、子供も跳んだ。

直線の拮抗。互いに相手が仕掛けていることを認知しながら、し

かしその足を止めることはない。二人は刹那の内に距離を詰めると、互いに首筋目掛けて必殺の一撃を繰り出した。

金属音が闇に響く。

二人の間でぶつかり合った刃物はギリギリと火花を散らし、そして弾かれたのは、やはり子供の方だった。

子供の右腕が大きく後方に振れる。

それにより、子供が半身体勢になり、腕の無い隙だらけの左半身が男の方を向いた。

絶好の好機……ッ！

男は即座に手首を捻り、刀を水平に寝かせると、子供の首を両断するべく横一文字に薙いだ。

銀の刃が、赤い線を引きながら夜空を弄る。

自身を切り裂かんと迫り来る凶器を前に、しかし子供はおくびにも恐れることなく、身体を反らせるだけで斬撃を躲して見せた。

くそ……っ。

男は心中で悪態を吐く。

詰んだと思ったが、相手も一筋縄にはいかない。男は連撃を畳み掛ける為に前へ一歩踏み込み、そこで子供が不穏な動きをしていることに気が付いた。

難いだ刀はもう子供の上を振り切っているというのに、どこから男はもう次のモーションに移っているというのに、仰け反った子供の身体が起き上がらず、更に地面へと落ちていく。

「な　　ッ」

思わず驚嘆の声が出る。戸惑いを隠すことができない。

何をしているんだ、コイツは……！？

バランスを崩した、という風には見えなかった。だとしたら、自ら倒れたのだろうか。……しかし、一体何故？

自ら倒れるメリットが、男には見当が付かない。片方しかない腕は、身体が地面に衝突するのを防ぐ為に使うとして、しかし上から刀を振り下ろしてしまえば子供にそれを防ぐ術はない。それとも、地面に衝突することを覚悟で刀を受けるのだろうか。だが、それでこの子供が優位に立てるとは思い難い。先程から子供のナイフは自分の日本刀に弾かれている。その上、不安定な体制からの迎撃だ。例え成功したとして、ナイフを弾いて馬乗りになってしまえば、あの小さな体格では抵抗できなくなるだろう。

なら何故だ？　何故、コイツは自分から倒れた？

「……………いや」

そうじゃない、と。

そんなことは関係ない、と脳内を渦巻く余計なモノを振り払う。

疑問を抱くなど、戸惑いを覚えるなどお門違いだ。化物は化物らしく、ただ相対するモノを殺すことのみを思考していればいい。

自身に暗示をするように心中でそう呟くと、男は両手に力を入れて刀の柄を握り込み、子供にその刀身を振り下ろした。

その瞬間、男の目には、子供の口角が歪に吊りつがったように、見えた。

ダンッ、と地面が爆ぜる。

舞い上がる土煙と共に、ぐるりと子供の右半身が持ち上がった。

「は　　ッ!？」

それは、目を疑うような動きだった。

子供は右足の踵をアスファルトに叩き付けると同時に身体を捻り、その小さな体軀を回転させたのだ。

日本刀の刀身は右半身のあった場所をすり抜け、子供の背中を掠めて黒いシャツを薄く切り裂いた。減速することなく落下した刀の刃先がアスファルトを砕き、コンクリートの欠片を飛ばして停止する。

しかし、子供の動きは刀を避けるだけに終わらなかった。

子供は勢いをそのままに空中で半回転すると、男の腕と頭部の間を縫うように右足を差し入れ、蹴りを放った。

男のこめかみに子供の右の爪先が飛ぶ。

「しまっ ！！」

迫りくる影を避ける為、男は上半身を逸らして回避を試みるが、それは僅かに遅かった。

さながら鞭のようにしなる子供の右足は、男が回避の動作に移る前にその側頭部へと近付いていき、そして

男の鼻先から三センチほど離れた場所を通り過ぎた。

足の長さが僅かに足りなかったようだ。空を蹴った子供は、そのまま回転を止めることなく路上に落下すると、二メートルほどの距離をゴロゴロと転がって体勢を立て直した。

いつの間にか《慈愛》を口にくわえていた子供は、右腕を地についた格好で顔を上げると、唯一感情を能弁に語るその双眸で男の姿を確認し、間もなく地面を蹴る。

三度目の刃の衝突。

そこからは怒濤の応酬だった。

三度響いた金属音は、更に四度、五度と続いていく。

相手に息を吐く隙さえ与えない。与えればそれはすなわち敗北に直結する、とばかりに、二つの影はそれこそ呼吸をすることすら忘れたように踊り狂う。

都合二十回、日本刀とナイフとの攻防を終えた男は、自身の胸を目掛けて突き出される《慈愛》の切っ先を日本刀の鎧で受け止めながら、心中で冷や汗を浮かべた。

何だ？ コイツは……。

彼の眼には、自分にナイフを向けてくる子供がひどく不気味に映った。

自分の動きに子供が　しかも、片腕がないにも関わらず　ついていけているということも異常だが、しかしそれは今は置いておく。彼自身、ナイフを扱った試しがない為わからないが、日本刀とナイフとでは機動性が異なるのだから、子供が自分の動きについてくるというのも、土台不可能な話でもないのかもしれない。

だが、ナイフで日本刀と渡り合っている、という事実は明らかに異常だ。

そもそも、日本刀とは人体を両断することに重点を置いた、両手で扱う武具であり、それに対して、ナイフは利便性や機動性を重視した、片手で扱う武具だ。

その重量の差など明白。その上、相手は非力な子供だ。全力で振るった日本刀をナイフで受ければ、その衝撃で手が痺れ、感覚が麻痺し、一時的とは言え物を満足に持てなくなる。だと言うのに、こ

の子供は日本刀の斬撃を　弾かれているとは言え　ナイフで受け続けることができる。

コイツ、本当に人間か？

いよいよ、男はそんな疑念を懐く。

何も、子供の異常性は防御だけに留まらない。男に攻撃を仕掛けてくる子供の、型の掴みにくいケモノのような奇妙な動きは、およそ人間の扱う体術だとは思えない。

だが、あの構え……。

子供の、ナイフを逆手に構えた姿が妙に引つ掛かる。どこかで見たことがあるような、誰かに似ているような　だが、一体誰に似ているのか、それが男にはわからない。

「くそ……っ」

突き出された子供の右手を、男は右半身を後方に引いて躲すが、僅かに躲しきれずにナイフの切っ先が男の胸に切り傷を作った。

どうにも殺し合いにのみ意識を集中することができない。余計なことを考えてはいけないとわかっていながら、子供のナイフを扱う姿が、彼の記憶に残る誰かの面影に重なる。

「くそっ……………！」

判然としない、靄のかかったような記憶に苛立ちが抑えられない。

男の動きも、心なしに鈍くなってきた。

刀を叩き付ける。

子供は身を翻してそれを避けると、跳躍して男の脇腹に回し蹴りを放った。

それを、男は左手で受け止めて足首を掴み、そのまま高層ビルの灰色を目掛けて投げ付ける。

子供は飛ばされながらも空中で身体を回転させ外壁に着地すると、バネのように膝を曲げて衝撃を殺し、軽く蹴って緩やかに路地へ降り立った。

その一連の動作を凝視していた男が、静かに呟く。

「……ようやく思い出した」

刃先を下げたまま立ち上がると、男は憎々しげに顔をしかめながら左手で前髪をかき上げる。

「どこかで見たことがある気はしていたが……へえ、道理で」

目前に立つ黒い影　性別すら判然としないような幼子の正体、それは十三も歳の離れた義弟だった。

男は弟が産まれる前に家を出て一人で暮らしていた為に、顔を合わせたことそ一度ほどしかなかったが、その顔、そしてあの動きは確かに見覚えのあるものだった。いや、面影がある、と言った方が正しいかもしれない。男が実家に帰ったのは、もう九年も前

のことになる。その上、その頃の弟はまだ一歳にも満たない赤子だった。外見が様変わりしているのは当然だ。それでも、男が子供を自身の弟だと気付くことができたのは、子供の顔とそのケモノのような動きが、母親のそれと似ていたことに基因するだろう。

「《無銘》の血族だとは気が付いていたが、まさか弟だったとはな」

意外だ、と言いつつも、男にはさして動揺した様子はない。その顔からも既に苛立ちは消え失せ、そんなことはもうどうでもいいと、自らの弟に向けた双眸で語っていた。

「……そうですか。ようやく気が付きしたか」

黒い服装の子供　弟が、掌の上でくるくると《慈愛》を回しながら、落ち着いた声で呟く。

「ああ。ようやく、な。　で、お前の目的は何だ？　何で俺を狙う？　それにその腕。俺の記憶が間違ってなければ、お前は五体満足で産まれていたはずだが？」

「一度にそんなに訊かないで下さいよ。まあ、取り敢えず最初の質問に答えますが、ぼくには目的なんて大それたモノはないです。だから、強いて言えば、事後処理、ですかね。やるなら徹底的につてヤツです」

事後処理……………？

男は心中で子供の発した言葉の真意を探りながら、しかし表では平静を装い、世間話をするような調子で弟との会話を続ける。

「へえ、『事後処理』なんて、また難しい言葉を使うもんだ。ということは、俺を狙うのもその『事後処理』ってヤツの一環か？」

「まあ、そうですね。その通りです。ついでに言えば、右腕は『事後処理』の途中でなくしてしまいました。知ってます？ 腕一本ないだけでも、結構生きづらくなるんですよ」

子供は掌の上で回転させていた《慈愛》を、グリップを逆手に握って止めると、無表情のまま、はあ、と息を吐いた。

子供の一連の動作を眺めていた男は、ただ子供が息を吐いただけだと認識し、程なくして、それが溜息であったことに気が付いた。
気が付いた上で、敢えてそれを無視して、男は「だらうな」と返事をする。

「世間一般で言えば、両手両足が揃ってるのが常識だから、お前みたいな欠けた人間には世知辛いだらうよ。で、腕を失うくらい大変な『事後処理』が何であるのかは、教えてくれないのか？」

「教えるまでもないでしょう？ そもそも、ぼくらにできることなんて一つくらいしかないんですから」

「まあな」

短く答えながらも、男はようやくその答えに辿り着いたところだった。

成る程、と心中で頷く。

いざ結論に辿り着いてしまえば、確かに教えてもらうまでもないような、至極簡単なことだった。もっとも、子供の最後の一言を聞

かなければ、男は結論には辿り着けないままだったのだろうが。

《無銘》とは 殺人を生業とする一族だ。子供の言う通り、そんな一族にできることなど、生物を 人間を殺すことの一つくらいしか存在しない。そして、子供は同族である自分に斬り掛かってきた。つまり、この子供が目的としているのは同族殺しだ。同族ではなく家族、という線も考えられなくはないが、『徹底的に』という言葉から、家族より同族の方が可能性は高い。おそらく、この子供は《無銘》と呼ばれる存在を根絶やしにしようとしているのだろう。

しかし、『事後処理』で同族殺し、か……。

一体この子供の身に何があったのか。その口振りから察するに、子供が《無銘》と呼ばれる誰かを殺したことから同族殺しは始まったのだろうが、子供と関わりのある同族など男の思い浮かぶ限りでは、自身の義理の親であり、子供の実の親である二人しかない。ならば、十中八九、この幼子を同族殺しへと駆り立てたのはそのどちらかか、あるいはその両方だろう。《無銘》は繋がりの希薄な、良くも悪くも『自由』な一族だ。他の《無銘》と関わっているとは考えにくい。

そこまで考えが及んでいながら、兄は弟に問い掛ける。どうして親を殺したのか、と。

その問いに、子供は少しだけ顔を俯かせ、それから、

「『自由』を得る為ですよ」

おそらくは微塵も考えていないであろう言葉で答えた。

「ハッ、実に《無銘》らしいことで」

その答えをどう思ったのか、義兄は一笑し、そうして二度目の会話は終わりを迎えた。

「では」と、義弟が逆手に握っていた《慈愛》を反転させ、構える。

「そろそろ終わりにしましょうか。お互い血塗れですし」

その言葉に、男は初めて『傷』というものを意識する。言われて見れば確かに、相手も自分も身体中切り傷だらけで、全身が赤に包まれていた。

「
っ」

と、男が傷を認識した途端、身体中に痛みが駆け巡った。さすがに声は上げなかったが、容赦なく身体を蹂躪する痛み、男は顔を苦悶に歪める。当然だ。これだけの傷、痛みがないことの方がおかしい。今まで男が平然としていられたのは、自身の身体の傷にさえ神経が向かないほどまでに、弟との殺し合いに　否、弟という存在に意識を集中させていたからだろう。

しかし、だとすれば、アイツは人間じゃないな。

無表情でナイフを構える子供を見て、男は改めて思う。

自身と同じくらいの傷を負い、そしてそれを認知しながら、その傷が最初からあったものであるかのように、苦痛という感情をまったく表に出さないこの子供は、既に死んでいるゾンビか元々命のないアンドロイドのようだ。少なくとも人間だとは思えない。人間に

はあそこまで感情を殺すことなど出来ない。

「まさかまさか、本当のバケモノがこんな所にいるとはな。しかもそれが弟。世界は広いようでいて狭いよなあ」

語りかけるように言葉を紡ぐが、子供は当然のように答えない。ただ無表情に、しかし揺るぎない殺意を瞳に灯し、男を正視する。

男は静かに笑みを浮かべると、刀を左肩に担ぎ、右手で自身の弟に手招きをする。

「ほら。来いよ、成功例。失敗例が相手になってやるぜ？」

その言葉に、ナイフを構えた黒い影が揺らぐ。ゆらり、と右に振れると、ダンッ、と響く爆発音と共に弧を描きながら迫ってきた。

男は刀を肩から下ろすと柄を両手で握りしめ、刀先を下げたまま子供を視線で追う。

一メートルほど距離を詰めたところで、子供は右腕を右後方に反らし、男に向けて《慈愛》を投擲した。

刃が、白銀の尾を引きながら夜空を駆ける。

男は刀を振り上げてそれを弾き飛ばし、視線を再び前方に戻すが、そこに子供はいなかった。

視界にはコンクリートの灰色だけが広がっている。

それを瞬時に認識すると、男は背後を振り返り、月明かりに

煌めく何かを視界に収め 反射的に左半身を後方に引いて身体を
反らした。

刹那、鼻先三寸という距離を、《慈愛》より一回り小振りのハン
ティングナイフが通過する。

男はナイフから伸びる子供の腕を左手で掴んで自身に引き寄せる
ように引つ張ると、その先にある頭部へと回し蹴りを放ち 子供
の頭部から三十センチほど離れた所で足を止めた。

「 チッ」

男は舌打ちをしてそのまま子供を後方へと投げ飛ばし、忌々しげ
に子供を睨む。

「………… お前………… どんだけナイフを隠し持つてるんだよ…………」

投げ飛ばされた子供は地面に手を着き、衝撃を往しながら着地
する。その口には刃渡り十センチほどの折り畳み式ナイフがくわえ
られていた。あのまま男が蹴りを放っていれば、男の足に折り畳み
式ナイフが突き刺さっていたことだろう。

子供は身体を起こすと、右手に握っていたハンティングナイフを、
ベルトに付けたシースと呼ばれる鞘に一旦収納し、折り畳み式ナイ
フの刀身を収納してズボンのポケットの中にしまつと、もう一度シ
ーズからハンティングナイフを取り出す。

「まあ、そこがナイフの利点でもありますしね」

答えになっていない返答を男に返し、子供はもう何度目かになる

構えをとる。その背後には、男に弾き飛ばされた《慈愛》が、さながら勇者を選定する聖剣のようにアスファルトに突き刺さっているのだが、しかし子供がそちらを気にする様子は微塵もない。

まるで、《慈愛》が他のナイフと同等とでも言っているようだ。

それとも、他のナイフを《慈愛》と同等だと思わせたいのか。

男は僅かだけ頭を悩ませ、結局何も言わずに柄を両手で握り、応戦の体勢をとった。

直後、子供の身体が跳ね、男の心臓にハンティングナイフを突き出す。

胸に迫る刃物を男は上半身を捻って躲すと、即座に身体を戻して子供の首を横一閃に薙いだ。

子供は身体を逸らしてそれを躲す。

そのはずだった。

それは 偶然の出来事。

柄を握っていた男の手が滑り、刀身の位置がずれて間合いが伸びたことによって、躲していたはずの刃先が子供の左目から右目にか

けてを切り裂いたのだ。

「……………つああ、あああああああつ！！」

初めて、子供が人間らしい感情を吐露させ、右手で顔を押さえて踞る。ポタリポタリと、その下に、赤い液体が小さく水溜まりを形成させていく。

苦痛に喘ぐ声。

激痛に悶える体。

悲痛に泣き叫ぶ子供。

男はただ呆然とその光景を見下ろして、それからハッとしたような顔で自身の手を見る。

赤く赤く色付いた掌。

それは男の血か、それとも子供の血か。

ねっとりとした液体はぬらりと掌を這い、腕を伝って地面に零れた。

しばらく、心を奪われたように眺め続けた男は、フラフラとした力ない足取りで地面を転げる子供の傍に立つと、日本刀を逆手に握って振り上げ

「ちょっと待て」

突然の声に制止した。

男がゆっくりと振り返る。

そこにいたのは、一人の女だった。

緑色をした髪をポニーテールに結わえ、学生服の上に白衣を纏った一人の少女が、立っていた。

「そいつは私の駒だ。勝手に殺されては困るな」

不意に響いた足音に、男は目蓋を開き顔を上げる。見ると、視界の奥、五メートルほど離れたビルの陰に一つの人影があった。

「よう。辛気くさい顔してんなあ。もしかして夜の路地に嫌な思い出でもあったかあ？」

ケタケタと声が響く。

「……………」

その問いには答えず、男は壁に預けていた背を離して一歩前へと踏み込んだ。

ぴちゃり、と水が跳ねる。

声は男の返答など最初から期待していなかったのか、その声音に不快感を滲ませることもなく言葉を続ける。

「しかし、いくらムシヤクシヤしてたからって、人一人殺すのはやり過ぎだと思うぜ？ いや、《無銘》相手に人を殺すなんて言うつもりはねえが、ちゃんと後先つてもんを考えて行動して欲しいね。《無銘》である手前には取るに足らない些事であっても、俺にとっっちゃ重大なんだよ。濡れ衣で警察に睨まれるなんて御免だぜ」

その言葉に、男は視線を下 自身の足下に向ける。そこには、胸を両断され上半身と下半身に分断された死体が転がっており、その中から溢れ出た臓物と血液が路面を赤く染め上げていた。

特に感慨を抱くこともなく視線を前に戻すと、男はもう一步踏み出す。左手にある鞆に収められた日本刀の先端が左右に揺れる。男の右足が死体の右腕を踏み締めた。

「お前の事情なんか知ったことじゃない。どうして俺が、お前に気を使わなきゃいけないんだ？ そもそも、俺みたいな《無銘》をこんな人気のない場所に呼び出したんだ。死体の一つや二つ、傍に落ちてることくらい簡単に想像がついて然るべきだと、俺は思っんだが？」

「俺は決め付けるのが嫌いなんだよ」

「嘘だろ」

「まあな」

男は更に一步前へ進み、そこでようやく、人影の全容を視認する

に至った。

上はフード付きの白いパーカーに、下は所々が破けたジーンズという格好。背丈は百八十前後で、体格はやや細身。フードを目深に被っており、口元以外の顔が隠れている所為かどうにも性別を判別しにくい。その肩幅や声から察するに男だろう。

だが。

男は心中で呟く。

だが、コイツが本当に『本物』だとしたら、あるいは外面だけで決め付けるのは間違いだろうな、と。

「……お前が能代凌か？」

男がフードの人物に問い掛ける。

フードの人物は、男の睨め付けるような視線を受け、しかし唯一覗く口元に飄々とした笑みを張り付けたまま、「ああ」とその問いを肯定する。

「俺が手前を呼び出した能代凌だぜ　つっても、俺が本当に能代凌なのかは、手前にはわからねえだろうけどな」

ケタケタと肩を揺らす白い影を前に、男は「だろうな」と心中のみで同意する。

能代凌。

それは、名称と言うよりもむしろ、称号と言った方が意味合い的には近い。

体型から骨格、声、筆跡までを変化させて他人に成り代わる、もはや特殊メイクの域すらも凌駕するほどの度を越えた変装技術と共に、一世代に一人にのみ受け継がれると言われる、《代理人》の称号。

その称号を名乗る人物は常に何かしらの人物に『化けて』おり、故にその正体を知る者は誰一人としていないとされる。否、元より《能代凌》に正体など存在しない。アレは《能代凌》を名乗っている時点で自分を棄てたも同然だ。しかし、それでも敢えて正体を語るとするならば、正体がないことこそが彼（あるいは彼女）の正体であるとするべきだろう。

そんな人物の変装を見抜く術など男は持っていないし、例え変装を見抜く術を身に付けていたとしても、その正体がわからないのだから、目前の人物が能代凌であるかなど判別できるはずがない。そもそも、こんな陽炎のような人物の真偽を確かめようとすることこそ間違いなのだ。

「だが、お前が能代凌なのかどうかなんてことは、俺にしてみれば特別重要でもなんでもない。お前の素性なんてモノは、お前が『俺を呼び出した』能代凌だつてことがわかればそれで十分だ。俺にとって重要なことは、今対峙しているお前の『誠実さ』だけだからな」

平然と言い放つ男。

事実、彼には目前に立つ人物が誰であるか、何であるかなどは関係ない。ただ、その人物の持ち出してきた報酬こそが重要なのである。

り、故にそれ以外のことなど些事も同然だ。

パーカーの人物 能代凌は口元に刻まれた笑みを色濃くさせる。

「へえ！ 本物がどうかもわからない相手に誠実さを求めるなんて、また随分と利己的なヤツだな。少しはこっちの真偽について気にかけてもバチは当たらねえと、俺は思っけど？」

可笑しそうに可笑しそうに声を上げる能代だが、しかし対照的に男は口を一字に結んだまま眉一つ動かさない。その様子に興醒めしたのか、能代は一転してテンションを下げ、「ま、いいけど」と話題を転換させる。

「 で？ ここに来たってことは、俺の依頼を受けるってことだと受け取っていいんだよね？」

「ああ。受ける気がなければこんな陰気な場所には来ない」

「ハッ、そりやまっただ」

詰まらなそうに吐き捨てる能代は、パーカーのポケットに手をつ込むと中から取り出した何かを放った。

きいん、と。

男の足元に落ちた何かが音を立てる。

男は自身の足元に転がる金属片に意識をとられるも、僅かに一瞬。眼球のみで足元を一瞥し、直ぐ様視線を能代に戻す。

「……何だ？ コレ」

「鍵」

「は？」

訝るように眉根を寄せる男に、能代は鍵だ鍵だ、と面倒臭そうに繰り返す。

「穴に突っ込んでドアの開閉を操作する金属片。明日手前が行くことになる学校の鍵だ。一応マスターキーだから、建物内のドア全て開閉できると思うぜ」

「へえ。また随分と親切だな。何だ？ それだけ成功させたいのか？ それとも、それだけ失敗されると困るのか？」

言いながら、男は足元の鍵を拾い上げる。一円玉大の大きさの丸い鉄板から、凹凸のついた長細い鉄板が伸びる、何の変哲もない鉛色の塊。それをズボンのポケットの中にしまうと、顔を上げて能代に挑発するような視線を送った。

一方能代は男の問いに頭を悩ませているのか、後頭部を左手で掻きながら右上を仰ぎ見たり腕を組んで俯いたりをした後、

「ま、そうだろうぜ」

まるで他人事であるかのように声を吐いた。

「成功させたいから、失敗したら困るから、お前みたいな殺人キチに依頼してるんだらうぜ。どうでもいいことだったら自分で殺つ

てるだろうし、そもそもどうでもいいことをやるうとはしねえよ」

俺はな、と言葉尻に付け加えて締め括られた能代の言葉に、男は顔を俯かせる。

愉しそうに歪めた顔を、能代から隠すように。

「確かに、それもそうだな。いや、愚問だった」

下を向いたまま呟くと、一つ呼吸をして顔を上げる。再び能代へと向けられた男の顔に笑みはなく、一文字に結んだ不機嫌そうな仏頂面に戻っていた。

「で、俺への依頼ってのは何だ？　俺は誰を殺せばいい？」

「全員だ」

「は？」

依然と言い放たれた声に男が啞然とし、聞き間違いかと心中で首を傾けていると、能代は至極真面目な口調で「だから、全員だ」と返した。

「学校にいるヤツ全員。生徒から教師、事務、警備までみーんな」

「……いや、ちょっと待て」

男は動揺を隠すことも出来ず、首を左右に激しく振る。聞き間違いかと思ったが、どうやらそうではないらしい。

「確かに俺は多人数相手の殺人技術も身に付けてはいるが、それでも殺せるのは精々十人までだ。さすがに学校にいる人間全員つてのは無理だぜ。まさかその学校には十人以下だつてことはないだろう？」

「ああ、別に全員の息の根を止める必要はねえよ。ま、全員を殺す意気込みでいてくれつつコトだ。可能な限りを殺して、あとは動けなくしてくればそれでいい」

能代の言葉に男は僅かだけ思考を巡らせた後に顎を引く。

「了解した。依頼内容は学校にいる人間を可能な限り殺害 最低でも行動不能にすること。報酬はアイツとの殺し合いだな？」

「ああ。 あ、それと1 Dの教師は殺すなよ。それ、俺だから」

「……そんな区別がつくと思うか？ あんな人間だらけの場所で、人殺しの最中で」

「無理にでも区別して貰わねえと。こちらら巻き添えで死ぬなんて御免だ」

「だから、お前の事情なんか知らないと言っているだろう？ 嫌なら目印でも付けてろ」

「目印ねえ……。例えば帽子とかか？」

「冗談のつもりで言ったのだろう、能代がケタケタと肩を揺らしている」と、

「違うな」

男が愉しそうに口角を吊り上げて呟いた。

タン、と響く音。

直後、能代の左腕に鋭い痛みが走った。

「　　つつ……」

能代の口から苦痛に満ちた声が漏れる。

見ると、パーカーの左の袖に十二センチほどの穴が空いており、そこから溢れ出した赤い鮮血が能代の白いパーカーを赤く染め上げていく。

「それが目印だ」

一瞬の間に能代の後方へと移動した男は、いつの間にか抜いていた両刃の日本刀を払い、刀身に付着した血液を飛ばす。

そんな男へ、能代は左腕の傷口を右手で押さえながら忌々しげな視線を向ける。

「……………これだから嫌いなんだよ。お前らみたいな暴力的な連中は……………」

「別に好かれないとは思っていないからな」

三章：改め、開幕（前書き）

登場人物紹介

・ぼく……語り部。正体については大体予想がついているんじゃないかと思います。はい。

・西牟婁^{にしむろ}枢^{かなめ}……自称《魔女》の二十代女性。緑髪に白衣。最近、青に染め直そうかな、などと言っている。何がかは察して下さい。

・自称上岡くん《じしよう かみおかくん》……ぼくのクラスメイト。野球部一年。爽やかなイケメン……だと思っていたのだけど。

今後、諸事情により投稿するペースが落ちると思います。申し訳ありません。

三章：改め、開幕

今までの人生　両親が死んでからの余生を、ぼくみたいな偽者が、あるいは私みたいな愚者が、何の障害もなく生きてこられたというのは、偶然と言うにはあまりにも出来過ぎた　ともすれば奇跡のような、そんな日々だったのではないだろうか。

ふと、そう思った。

人生は時として奇跡に値する偶然が起こる。

けれど、ぼくの生涯は上手くいき過ぎていた。

嫌っていた両親が死に、二年間孤児院に保護され、そして西牟婁さんに引き取られる。

あまりにも偶然じみた繋がりが多かったけれど、しかしどこか必然的だった。

きっと、これは誰かが私に与えてくれた幸運だったのだろう。

だから今　、そのツケが回ってきたのだ。

正門から正面玄関まで続く一本道のその半ば、ぼくは猛烈な違和感に襲われて足を止めた。

学校が妙に静かな気がする……。

学校には教師でも三十人以上、生徒となれば千人以上も在席していて、その他にも事務の職員といった人達もいる。確かに、常日頃からその全員が騒いでいるわけではないので、校舎の外にまでけたたましく声が響くほどに騒がしいということはないのだが、しかしどうにも静か過ぎる。物音一つしないと言うか、不穏な空気を感じたと言うか……そう、それはさながら人のいない廃墟のようで、学校から人間の気配がまるで感じられないのだ。

それは、同じように足を止めた自称上岡くんも思っただけで、見上げると怪訝そうに眉間にシワを寄せていた。

「キミはどうする？」

程なくして、自称上岡くんが問い掛けてくる。

この異常に足を踏み入れるのかと、そう訊いているんだろう。

「勿論、行きますよ」

当然だと頷いて、前へ一步踏み出す。

目前に聳えるのは、静寂に包まれた白い建物。日常の形を保ちながらその内に異常を内包するそれは、擬態により獲物を捕食する生物に似ていた。

一歩でも足を踏み入れてしまえば、何かに取って食われてしまうような錯覚。

待ち構えているであろう得体の知らないモノへの恐怖に身体が震える。ただの一瞬でさえ踏み出すことを躊躇い立ち止まってしまえば、足がすくんでその場から動けなくなってしまうだろう。もしかしたら、膝から崩れ落ちてしまいかもしれない。いくらあんな地獄みたいな家で育てられたとはいえ、ぼくはどこまでも平凡な人間だ。怖いものは怖い。それが未知のモノであるのなら尚更に。

……人はなまじ余分な知識を詰め込めるだけに、だからこそ『未知』に恐怖する。幽霊然り、宇宙人然りだ。

それは至極当然の心理。

人間は知識で生き残ってきた生物だ。知恵を駆使して自分よりも何倍も巨大な生物に打ち勝ってきた。それこそ食物連鎖から抜け出すほどにまで。だから、人間は自身の知識にないモノに対して恐怖を懷く。

だけど　それだけじゃない。それで終わりだったら、人間の文明はここまで発展していない。

人間は『未知』を恐れる。それは当たり前。しかしだからこそ、人間は『未知』を無くそうとする。『未知』という領域に足を踏み入れる。『未知』を理解しようと、拒絶しようとする。たぶん、それが人間の本能みたいなものなんだと思う。

そんな言い訳を思考しながら、ぼくは自称上岡くんの顔を盗み見る。この人には　この人だけに弱い自分を見せるわけにはいかないのだ。

正面玄関に辿り着いた。

ガラス越しに中を覗いてみると、そこには、何の変哲もない下駄箱が並んでいるだけであり、その奥にもただ廊下があるだけだった。

異常は……見当たらない。

少しだけホツとする。下駄箱からして死体が転がっている、という光景を想像していただけに、いつも通りの下駄箱を前に迂闊にも日常を投影してしまったのだ。

そう、それは迂闊だった。

「　　っ！！」

思わず息を呑む。

ガラス戸を開けた途端、校内から『それ』独特の臭いがした。

「これは……」

自称上岡くんの声が聞こえる。彼もこの臭いは何であるのかわかったようだった。

それは　日常的などんな匂いよりも嗅ぎ慣れた臭い。

両親や兄が常日頃からその身に纏っていた異臭。

人の　生物の終わりを如実に連想させる死臭。

それは 生物を殺害した後に漂う、血の臭い。

「……引き返すのならここが最後だと思うけど、それでも行く?」

自称上岡くんが訊ねてくる。 その言葉で、折れかけていた心が元の形を取り戻す。

何を当たり前のことを言っているんだ、と頭の中で反論しながら、すくみかけていた身体を叱咤する。

「当然です。その言葉、そっくりそのままお返しますよ。ここから先、たぶん貴方の予想する以上の惨劇が広がっていますよ? 貴方こそ引き返した方がいいんじゃないですか?」

「馬鹿言わないでくれよ。『女の子』を置いて逃げるなんて、そんな恥辱は死んでも御免だ」

「やっぱり気付いていたんですか いえ、知っていた、が妥当ですかね? ……まあいいです。とにかく行きましょうか」

言って、ガラス戸を潜る。

ああ、と短く頷くと、自称上岡くんもぼくに続いた。

校内に入り、いつもの習慣でスリッパに履き替えようと下駄箱に手を伸ばす。

「スリッパには履き替えないで靴のままで行った方がいいよ」

不意に、自称上岡くんが言った。

なるほど、と頷く。確かに、そっちの方が動きやすい。自称上岡くんからの助言であることが若干不本意だけれど、従うことにしよう。

下駄箱の横を通り抜け、土足であることに僅かながら後ろめたさを感じつつ、廊下にかかる。

果たしてそこは、血の海と化していた。

一面の赤。

まさに地獄絵図だ。

赤い廊下に転がるのは、同じく赤に染まった首や腕や足や胴体バラバラに解体され、ヒトガタをやめさせられた肢体の数々。胴体から鑑みるに、廊下にある死体の数は十五から二十の間くらいだろう。腕や足が無数に散布している所為で正確な数はわからないけれど、十以上であることは間違いない。

「へえ、これはこれは」

特別何の感情も含まれていないような声で呟くと、自称上岡くんは近くに転がっていた胴体に歩み寄ってしゃがみ、首の断面を覗き込んだ。

「な、何をしているんですか……？」

何をしているのか気付いていながらも、そう問い掛けずにはいられない。

自称上岡くんは、こちらを振り返りもせず、答える。

「何って、観察だよ。死体から読み取れる情報ってのも案外捨てたもんじゃないぜ？」

あり得ない。

直感的にそう思う。

彼は、確実に普通の学生ではない。普通という範疇からは明らかに逸脱している。いや、普通じゃないことくらいは最初から名前を聞いた時からわかってはいた。ただ、この男は普通じゃないだけじゃなく、異常なんだ。

彼は、いったい何者なのだろうか。

今更ながらに思う。

思えば、血の臭いにも気付いていたし、最初から彼は『逃げる』という選択肢を持っていなかった。自分が校舎内に入ることを前提として、ぼくに『キミはどうする？』と訊ねてきていた。

「……………貴方、何者ですか…………？」

気付いたら、声に出して訊ねていた。

今は異常事態だ。僅かでも不安因子を残しておいてはならないと、本能的にそう思ったのかもしれない。何故ならそれは即ち、自身の危険に直結するのだから。

彼の顔がこちらを向く。

憎たらしいまでに整った、まるで作り物のようなその顔は至って真剣な表情で、嘘臭さなんてものは微塵も感じられない。けれど、だからこそどこか違和感を覚える。

彼の顔は いや、顔だけじゃない。腕も足も指も髪も眼球も眉も耳も口も鼻も皮膚も服も声も表情も雰囲気も足音も、何もかもがあまりにも『完璧』過ぎる。

だからこそ、嘘臭い。

「何者つて……。また忘れたの？ 同じクラスの上岡だよ」

「違います」

溜息を吐くように答える自称上岡くんは、ぼくは断言する。あるいは断定する。

彼は上岡くんではない。彼は『自称』上岡くんだ。

「最初から気付いてはいたんです。ぼく ううん、私は嘘吐きなお兄ちゃんとはかり接してきた。と言うより、お兄ちゃんとか接して来なかった。だから、何となくだけど、本当に感覚みたいな曖昧なものだけど、解るの。嘘を吐くタイミング、みたいなものが。だって貴方は」

息を大きく吸い込む。

肺を空気で満杯にする。

緊張とか焦りとか動揺とか、そういうものが表に出て来ないように。

「だって、貴方はお兄ちゃんに似てるもの」

認めるのが嫌だった。

彼が兄に似ていると思ったということは、少なからず、私が彼に兄の面影を重ねていたということだ。彼を一瞬でも兄だと思ってしまったということだ。それは、私の中のお兄ちゃんとの思い出を汚すのと同じことだ。そんなことは、絶対に認めたくなかった。

だけど、限界が来た。

こんな異常な空間の中に、嘘を吐いていた人間と一緒になんていたくない。だけど、私はこの人に　こんなお兄ちゃんの偽者なんかに弱い自分を見せることだけはしたくなかった。だから、私はこの人の嘘を見破るしか、なかったのだ。

私の言葉を皮切りに、重々しい沈黙は続いている。

自称上岡くんの顔は無表情だった。怒りに顔を赤くしているでもなく、何を言い出すんだと笑い飛ばすでもなく、全くの無表情。

全くの能面。

感情という感情が色褪せ、真つ白な仮面を被っているかのように無機質な顔。なまじ整っている所為なのか、それはマネキンのようにも見えた。

[illegible]

程なくして、自称上岡くんは屈ませていた腰を持ち上げると、笑い声を上げた。

無表情のまま。

「ひつあう……」

背筋が凍り付く。

怖い、と。

ただただ、そう思う。

何せ、声は笑っているのに顔はマネキンのままなのだ。

現実味が足りない。

不気味この上ない。

悪趣味にも程がある。

こんな人物を相手取るなら死体を前にしていた方がよっぽどマシだ。こんな人間じゃない。化物だ。怪物だ。

怪物は未だ、笑い続けている。

嫌だ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。
嫌だ。嫌だ。嫌だ。関わりたくない。近寄りたくない。触れたくない。見たくない。聞きたくない。話したくない。知りたくない。信じたくない。こんなモノは許容しきれないっ！！

踵を返す。駄目だ駄目だ。早く早く速く早く……っ！一刻も早くコイツから離れなければいけない。そうしなければいけない、だけれど怪ぶつがわたしの腕をつかんでいてはなれられないうごけないたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてたすけてよう……。

お兄ちゃん

!

「はいあ……、まさかだよ。いや、でも当然なのかな？ まあ、どっちでもいいか。だけど、『お兄ちゃんに似てる』ね。はは、確かに確かに。今までの《ぼく》を見ていた上で、そして《ぼく》という人外を識っていた上で、目の前に立つヒトガタを《ぼく》だなんて言つて退ける奴は、多分一人だっていないし」

え
⋮
?

不意に、発せられた落ち着いた声に、身体が硬直する。

まさか。

振り返る。

いや、でも……。

振り返る。

期待と不安、そして動揺。

あんな化物が……？　と思う反面、だけどやっぱり、そうであつて欲しいとも思う。

振り返る。

「久しぶり　と言っても昨日も会ってるんだけど。けどまあ、一応やっぱり、久しぶり、かな？」

そこにいたのは、どこか懐かしい雰囲気放つ、『自称』上岡くんだった。

三章：改め、開幕 2（前書き）

登場人物紹介

・ぼく 私《ぼく、あらため、わたし》……語り部。《無銘》と呼ばれる一族であるお兄ちゃんの義理の妹。妹であるだけの一般人です。

・自称上岡くん《じしよう かみおかくん》……ぼくのクラスメイト。野球部一年。爽やかなイケメン。して、その正体はなんと……ッ！

三章：改め、開幕 2

「…………え？ あ、う…………えっ？」

上手く言葉が出ない。

ホントにお兄ちゃんなの？ どうして《上岡》なんて名乗ってたの？ いつからそんな格好してたの？ 訊きたいことは湧き水のように次々と思い浮かぶのだけれど、頭の整理がつかず、言葉に纏めることができない。

「まあ、別にすぐに状況を呑み込め、とは言わないよ。クラスメイトが自分の兄貴だった、なんて展開、戸惑うのが当たり前前の反応だと思うし。その反応が見たくてクラスメイトに化けてたって理由もなきにしもあらず、だからね」

私のお兄ちゃんだと名乗った自称上岡くんは愉しそうな声音で、
ただど微笑みもせず無表情のまま、私に話し掛けてくる。その顔が、
全然似ていないのに 記憶にあるお兄ちゃんと重なって

「……………嘘、でしょ……………」

咄嗟に吐き出した声は、音が出ているのか自分でもわからないほどに小さく、掠れていた。

彼の言葉に嘘はない。彼の態度に嘘を吐くような素振りは見られない。そうとわかっていながら、自分で『似ている』と言っておきながら、しかし彼が兄だとは認められない。……………いや、認めたくないだけ、なのかな…………。昔のお兄ちゃんは、ここまでおかしく

はなかったから。だから、お兄ちゃんの変化を、お兄ちゃんがあの頃とは変わってしまったてことを、認めたくないだけ、なのかもしれない。

俯く私に、自称上岡くんが愉しそうな声をあげる。

「ぼくの吐く嘘がわかるんだろ？　だったら、そんな問い、無意味じゃないか」

「…………意地悪…………」

少しだけ顔を上げて、自称上岡くんを睨む。そんなうやむやにするような言葉じゃなく、「はい」か「いいえ」の二択で答えてくれれば、嘘なのかそうじゃないのかはつきりと判断出来たのに。……まあ、嘘を見破れると言い放った人間を相手に二択で答えるような人は、そもそも嘘なんか吐かないんだろうけれど。

私の視線を受けて、自称上岡くんはそれでも無表情を保ったまま、こちらを見下ろしてくる。

まるで、昔のお兄ちゃんのように。

「残念。ぼくは意地悪じゃなくて嘘つきなんだよ。君の言った通り、ね」

「うそだよ」

おどけるような声に即座に否定を入れると、彼は「まあね」とわざとらしく肩を竦めてみせた。

「確かに、ぼくは嘘つきだけど、意地悪じゃないわけじゃない。ぼくは《ぼく》を嘘つきで意地悪で捻くれ者でネクラで世間知らずな異常者だとも、思ってるよ」

何もそこまで自虐しなくても……

「自虐じゃないよ。ただ事実を言っているだけだ。実際、君だって嘘つきで意地悪だって言っただじゃないか」

「でも、それ以降のは言っていないよ」

「言っていないだけで、思ってるでしょ」

「そういう決めつけは良くないよ、お兄ちゃん……」

……あ

自然と口から出ていた単語にハツとする。

………仕方がない。認めよう。信じがたいけれど、認めたくないけれど、認めよう。思うだけなら、まだ誤魔化すことはできた。けれど、言葉にして、カタチを得てしまった気持ちになかったことにはできない。

「………やっぱり、お兄ちゃん、なんだ……」

絞り出したような弱々しい私の声に、自称上岡くん　お兄ちゃんは答えない。ただ、今まで私の腕を掴んでいたお兄ちゃんの手が離れて、そのまま私の頭の上に移動した。

「あ
」

ぽん、と伝わってくるお兄ちゃんの暖かな温もりに、一瞬頭が真っ白になって、それからカラー、と顔が熱くなる。まるでお兄ちゃんの手のひらが置かれたところ意外の感覚が消えてしまったかのように、私の意識という意識が否応なしにその部分に集中させられる。この歳になってまで、と思うと少し気恥ずかしいけれど、ただお兄ちゃんの体温を感じていられることが凄く嬉しくて、私はされるがままに撫でられていることしかできない。

不意に、一粒の涙が頬を伝った。

「え？ あ、あれ……？」

別に悲しくなんかないのに、辛くなんかないのに、胸を締め付けられるような想いが私を蹂躪する。堪えようとしても涙は止まらない。零れる滴は嗚咽と共に私の内側を吐露していく。

「……心配……、したん……だよ……」

「うん」

「不安……だった、ん……だ、から……」

「うん」

「お、おか……おかあさ、んと……っ！　お、とうさんが……し、しし死んで、て……。だ……っ、から！　おお、おに……おにいちゃん、もっ……死んじゃった、とおも……て……っ！」

「うん。ごめん」

「い、いい……いまさら、あやま、ないで……よっ！　わ、たし……わたしほんと、に！　しんぱい、したん……だか……ら！」

「本当に、ごめん」

「うううう……、おにい……ちゃん……ん、のっ！　ばば、ば……ば、かあ……！！！」

それから、お兄ちゃんに縋るような体勢で体を預けた私は、涙を流しながらバカバカと感情任せに叫び続け、お兄ちゃんは私の頭に手を置いたまま、抑揚のない平坦な声でうんうんと頷き続けた。

一頻り涙を流し終え、ようやく　そう、本当にようやく正気に戻った私を待ち構えていたのは、果てしない羞恥と後悔だった。

お兄ちゃんから二メートルくらい離れた所で頭を抱えてしゃがみ込み、小さく丸くなる。

うつわああああああ　っ！！　何やってるの私！？　なな、泣いちゃったよ私っ！？　しかも、お兄ちゃんの胸の中でっ！！　もう子供じゃないのに何しちゃってるのよ、もおおお　っ！！

少し気になってチラリとお兄ちゃんを見上げると、

「……………」

やはりと言つか何と言つか、相変わらずの無表情でこちらを見下ろしていた。

「……………」

その能面を見ていると、一人取り乱しているのが馬鹿らしくなってきた。

立ち上がってこほん、と咳払いをする。本日二回目。しかも同じ相手を前に。

「……………」ごめんなさい……………」

小さく頭を下げて謝ると、お兄ちゃんは「べつに」と抑揚もなく呟いた。

「別に気にしないよ。妹が兄貴に甘えるのは、当然だろ？」

その『甘える』という単語に、またも顔が熱くなる。

あ、甘えるってそんな……………いや確かにさっきの行動はそれ以外の何物でもないんだろっけれど、でももうちょっとオブラートに包んで欲しい。こちとらうら若き乙女なのですよ？……………まあ、学ラン着て男装してるから、見た目は男の子なのかもしれないけれど……………。

「で、どうする？」

「へ？」

急な問い掛けに間拔けた声をあげてしまう。

「これから、だよ。逃げる？ それとも進む？ ぼくはこの血の海の元凶に用事があるから進むけど、君はどうするの？」

「……………」

……………ん？

「……………さっき、最後だつて言つてなかった？」

お兄ちゃんが吐き出した言葉にデジャヴを感じつつ 正確には
デジャヴとは違うけれど 問い掛けると、

「最後だと思つていたモノが実は最後じゃなかった、なんてことは
漫画じゃよくある話だよ」

お兄ちゃんは無表情のままいけしゃあしゃあと答えた。

漫画つて……………

「ここは現実であつて漫画じゃないよ？」

「時々、人生を物語だつて言う人いるだろ？ だから人生も漫画も
同じだよ。同じ物語だ」

「そんなの屁理屈だよ……」

溜息を吐くように呟く。確かにそう捉えれば同じなのかもしれないけれど、漫画と人生じゃ、全然違う。人生は偶然が折り重なってできたものだけど、漫画は言ってしまうえば、そうなるようにしてできたものだ。例えるなら、狼と狸のようなもので、『科』を同じくするだけの別物だ。

「で、どうするの？」

改めて問い掛けられ、再度頭を悩ませる。

正直に白状すれば、これ以上こんな所にはいたくないし、こんな空間を作り上げた人となんて会いたくはない。とつと家に帰ってお風呂に入って眠って今日のことなんか忘れて早くいつもの日常に戻りたい。目の前に立つイケメンがお兄ちゃんだと判明して、しかもその胸の中で情けなくも泣いてしまった今、弱い自分を見せたくない、なんて強がりには、もはやどうでもいい。それに、相手がお兄ちゃんの偽者じゃないのだから強がる必要もない。だから、今ここで帰ってしまったても何ら問題はないのだ。

だけど

だけど、ようやく会えたお兄ちゃんと離れたくはない。

せつかく会えたのだから、もっと長い時間を一緒に過ごしたい。

……でも、ここにはいたくはない……。

だけど

いやでも

頭の中でぐるぐると回ってせめぎ合う二つの感情。よし！と意気込んで顔を上げるものの、いざ声に出そうとすると、やっぱりここにいたくない、という気持ちが決意を鈍らせて、口を開き合意を伝えることに躊躇して俯いてしまう。

ああ……、優柔不断な自分が憎い……っ！

早くしなきゃいけないとわかっていても、割りきって決断することができない。

それから何度も顔を上げては俯いてを繰り返して、

「……いく……行くよ。お兄ちゃんと一緒に」

結局私は、お兄ちゃんと一緒にいることを選んだ。

「そう」

お兄ちゃんはほんの僅かの無言の後、小さく顎を引いて頷くと、

「正直、君はついてくるべきじゃないと思うけど、まあ、個人の意思を尊重することにするよ」

そう言って、後方に向き直り、赤く染まった廊下を歩き出した。

その隣に小走りで駆け寄る。足で床を踏み締める度にぴちゃぴち

や、とまだ乾ききっていない血が跳ねて、スニーカーを赤く染めた。

このスニーカー、もう履けないなあ……。

頭の片隅でそんなことを思いながら、お兄ちゃんに尋ねる。

「どこに行くの？」

「犯人のところだよ　と言っても、本当にそこに犯人がいるとは限らないんだけどね。まあ、可能性は一番高いだろうとぼくは思うよ」

前方を見据えたまま答えるお兄ちゃん。

……いや、そういうことじゃなくて、

「今向かってる場所を訊いてるんだけど」

「ああ、そっちな」

お兄ちゃんがわざとらしく手を打って納得したような仕草をする。

「今向かってるのは、一年D組の教室だよ」

「へ？」

それって……

「うん。君が所属するクラスだよ」

平然と告げられたお兄ちゃんの言葉に、まるで稲妻が身体中を駆け巡ったかのように思い出されるのは、昨夜のこと。

『これから少しの間、身の回りには気を付けておけよ』

西牟婁さんにそう言われ、私は何と思ったか。

『まるでぼくがどこかの殺し屋にでも狙われているかのようなことを言う』

も、もしかして……

血の気がひく。

背筋に寒気が走った。

学校が血の海になってるのって、私の所為………？

額を嫌な汗が伝う。

まさか、とは思うものの、しかし西牟婁さんからの情報が間違っていた試しなんてない。

いや、偶然だ。私には関係ない。

理性が叫ぶけれど、そんなのはただの願望だってことはわかりきっている。

「……な、何で犯人がそこにいると思うの？」

だけど、その願望に縋り付かずにはいられない。私は自分の罪を簡単に受け入れられるほど強い人間じゃないから、選択肢が分かれているのならほとんどゼロの可能性でも、自分に救いがある方に縋ってしまう。

だというのに、

「まあ、ほとんど勘みたいなものなんだけどさ。わかるんだよ。何となく」

お兄ちゃんから返ってきたのは、明確な答えではなく、こちらの神経を逆撫でするような　言った本人にはそんな気はないのだからけれど　言葉だった。少しムツとする。……本ツ当に、この人は……。

「……こんな時にまで、嘘つかないでよ」

若干語尾を荒くしながら指摘すると、お兄ちゃんは「へえ」と感

嘆の声を上げた。

「本当に嘘を見抜けるんだ。正直疑い半分　　っていうかほとんど疑ってたんだけど、二度も見抜かれちゃ、信じざるを得ないね」

愉しそうなその声音に、更に苛立ちが募る。こんな状況だっていうのに、どうしてそう易々と嘘を吐けるのだろうか。三年ほどお兄ちゃんを真似てみてはいたけれど、未だにそこは理解できない。

三章：改め、開幕 3（前書き）

登場人物紹介

・ぼく 私《ぼく、あらため、わたし》……語り部。《無銘》と呼ばれる一族であるお兄ちゃんの義理の妹。最近の女の子の話に付いていけないのが密かな悩み。

・お兄ちゃん《おにいちゃん》……ぼくのクラスメイトである上岡くんを自称していた。あれからどういう成長をとげたのか、イケメンフェイス。まあ、元々、女の子みたいな顔立ちをしていたけれど……もしかして特殊メイクだったり……

・男の人……日本刀を所持した銃刀法違反者。真夏にスーッって……どうして自らを苦しめるようなことをするんだろう？

三章：改め、開幕 3

「お兄ちゃんの使う『正直』って言葉ほど信憑性のないものはないよね。嘘、これで四度目だよ」

刺々しく吐き捨てる。本当はもっと多いけれど　ただ、正確にはそれを『嘘』と言っているのかがわからないから、今言及するのはやめておく。

「確かに。その通りだ」

お兄ちゃんは、こっちの心境を知ってか知らずか、笑っているような弾んだ声音で言い、

「でも、嘘つきが絶対に嘘を吐くとは限らないぜ？」

心底可笑しそうな調子で、そう続けた。

「……………」

お兄ちゃんの言い分は、確かにその通りだと思う。嘘つきは嘘を吐くから嘘つきなのであって、決して正直に話さないから嘘つきなのではない。嘘を吐かないからこそその正直者とは、そもその定義から違うのだ。

だけど、

「だからって、お兄ちゃんが正直に話していたことにはならないよ」

それはそれ、これはこれ、だ。事実、お兄ちゃんは嘘を吐いていたわけだし。

『ごめん』

……そう、嘘。

人を騙す為に使う言葉、だ。

『本当に、ごめん』

ついさっき、泣きじゃくる私に対して口にした言葉。

それだって　嘘、だった。

「
」

奥歯を強く噛み締める。

あれは正直　堪えた。

たぶん、私を泣き止ませる為に言った言葉だったのだろうけれど、

しかし謝る気持ちが微塵もないのなら、いつそ謝らないでほしかった。そんな誠意の見られない謝辞なんて、相手の神経を逆撫でこそすれ、決して怒りや悲しみを静めるに至る効果は出ないのだから。
…………… まあ、私は狭量じゃないから何も言わないけれど……………。

だけど、嘘を見抜けるっていうのも果たして困りものだ。騙されていた嘘にも騙されていることができず、一人勝手に傷付いてしまう。

一転して陰鬱とした気分になる。はあ……………、お兄ちゃんとの再会
はもつと楽しいものを想像していたのだけれど、なかなか上手くいかないものだなあ……………。

溜息を残して、突き当たりの角を右に曲がる。そこに現れたのは
屋上まで続く階段だった。

階段は、死体が転がっているものの廊下ほど赤くはなく、所々に
廊下の元々の色である白が覗いていた。その白色がこの学校内に僅
かに残った日常みたいで、何だか異常に染められた足で踏み締める
ことに抵抗を覚えた。

靴跡で赤く塗り潰してしまわないよう気を付けながら、階段をの
ぼっていく。

会話が途切れてしまった所為か、ピチャ、ピチャ、と足を下ろす
度に鳴る音がやけに耳に響く。

不快な擬音だけが耳に届く静寂に、若干気まずいものを感じながら
階段をのぼっていると、丁度私の右足が踊り場を踏み締めたところ
で、お兄ちゃんが不意に訊ねてきた。

「…………君はそれを知ってどうするの？」

「え　？」

『それ』って、何？

代名詞に当てはまる言葉が咄嗟に思い浮かばず、呆気にとられて
いると、お兄ちゃんは「どうして犯人が君の教室にいると思うのか、
だよ」と捕捉し、私の答えも待たずに言葉を続けた。

「その質問にもしもぼくが答えていたとして、その答えが『君がい
るから』だったらどうするつもりだったの？　君の所為でこの人達
は死んだんだよってぼくが言ったら、君は責任をとって自害するつ
もりだった？」

どくん、と胸が高鳴る。脈打つ鼓動がどんどん速くなり、口か
ら溢れる呼吸が荒くなる。

「…………どう、するって…………」

どうするつもりだったんだろう…………。

お兄ちゃんの言った通りに自殺するつもりだった、なんてことは
ない。私にはそんな勇氣も度胸も、ありはしない。　いや、そも
そも私は、どうするかなんてことは考えていなかったように思う。
ただ、責任を負いたくなくて、原因は自分にあるのだと思いたくな
くて、ただただ胸中に蟠る不安感から逃げたくて、お兄ちゃんに問
い掛けたのだ。

お兄ちゃんは今更に続ける。

「知らない方がいいことも、世の中にたくさんあるんだぜ。いや、殊更そっちの方が多くくらいだ。知ったところで何にもならない、徳にもならないければ損にもならないような、ただ虚無感を味わうだけの、無意味な事実。現実にはそんなのばかりだ」

いつもは出さないような、あからさまな敵意を含んだ声。

まるで自らの怨敵向かって発せられているかのような低い響きに、つい、身を萎縮させてしまう。

私に向けられている感情ではない、とは理解しているのだけれど、しかし言葉自体は私に向けられている為に、お兄ちゃんに怒られているかのような錯覚を起こしてしまう。

「勿論、お前が知ろうとしていたモノも例外じゃないよ？　むしろ筆頭とも言っている。あんな事実なら、知るだけ無駄だ。だからお前は知らなくていいんだよ。『無知は罪だ』なんてよく言うけど、無知でいられることに勝る幸福なんてありはしないんだ。それなら、罪を背負ってでも無知でいるべきだよ」

そう、なのかもしれない。

生まれたばかりの赤ちゃんも、お城の中にお姫様も、何も知らない。知らないことがあることすら、知らない。だから、あんなにも幸せそうに見えるのだろう。

ただ……、

「……………それってもう、私がこの事件の原因だっって言っているよ
うなものだね」

「さあ？ どうだろう」言及すると、お兄ちゃんはおどけたように
肩を竦めて、白々しく誤魔化す仕草をとった。けれど、『知らなく
ていい』『知ったところで得をしない』なんてを言われれば、嫌で
もわかる。きっと、きっと、この惨劇を作り上げた人物は私を狙
っているのだ。理由はわからないけれど、本当に謎だけれど、私を
殺そうと学校にやってきて、そして、私が見当たらないから適当に
無差別に視界に映る人間を斬りつけていったのだろう。

その光景を想像してしまい、ぞわり、と身体が震える。

私の所為で……この人達は死んだのだ。

……そう、私の所為で……

「どうだっていいじゃないか、そんなことは」

「え……っ？」

呆氣にとられる。

どうでもいいって……

「原因が何であろうと誰であろうと、もう死んでるヤツは死んでる
んだからさ。君が自責の念を感じて自殺をしたところで、この状況
が変わるわけじゃない。死体が一つ増えるくらいだ。だから、原因
なんてどうでもいいんだよ。とれない責任なんて負うものじゃない。
それでも死んだ人達を想いたいなら、死んだ人達の分まで長生きし

て善行をしろ、なんて人殺しのぼくが言える台詞じゃないから言わないけど、でも、そうだなあ……、それでも想いたいなら、せいぜい好きなだけ悔やめばいいと思う。悔やんで悔やんで、死にたくないほど悔やみながら生きていけばいいと思う」

そんな人生は、さぞかし地獄だろうね。

そう、お兄ちゃんが言葉を締め括った頃には、四階に到着していた。

だから私は、お兄ちゃんに何も言い返すことができなかった。

……元より言い返すことなんて

「……………」

四階。

私の所属するD組の教室がある、四階。

この血塗れの学校を作り上げた犯人がいるかもしれない、四階。

「じゃあ、行こうか」

頷いて答える。

怖いけれど、涙が出そうなくらい怖いけれど、でも、行かなきゃいけない。さっきまでは、お兄ちゃんと一緒にいたいから、なんて理由で情性で付いてきていた。

でも、今は違う。

お兄ちゃんはある言っていたけれど、私には自分に責任がないなんて思えないのだ。だから、一端の原因を担う人間として、ただ何もしない、なんてできない。何もできることなんてないのかもしれないけれど、何か　何かをして犯人に一矢報いてやらないと、気が済まない。

他の誰のでもなく、　『ぼく』でもなく　『私』の気が、済まないのだ。

一歩踏み出す。

周囲に漂う血の臭いは、ここにきて一層に濃くなっていた。

吐き気が込み上げる。

慣れているとは言っても、身体に染み付いた薄い臭いがせいぜいで、ここまで濃いのは初体験だ。ぐわんぐわんと脳ミソが揺れ、視界がぐにやりと歪む。まるで異次元にでも飛ばされたかのように身体感覚があやふやになって、うまくバランスがとれない。

「大丈夫か？」

どれほど酷い顔をしていたのか、お兄ちゃんがほんの僅かに心配そうに歪めた顔で覗き込んできた。

カアッ、と頭に血が昇る。

このイケメンはお兄ちゃんのだと頭では理解しているのだけ

ど、無意識下にある本能はそんなのお構い無しに整った顔に対して憤慨の意を爆発させる。

そのお陰で、何とか意識を持ち直すことができた。

イケメンもたまには役に立つんだな、と少しだけ好感度が上がった！……いや、少しだけねっ！

「……大丈夫、みたいだ、ね」

お兄ちゃんは無表情で、ほっとしたような息を吐くと、すぐに前に向き直って足を進めた。

僅かにぼんやりとした意識のままその背中を追いかけながら、私はつい、場違いにも嬉しさに頬を緩ませてしまう。

嬉しい。

たとえ感情の込もっていないモノだったとしても、お兄ちゃんが私という個人を気にかける、ということがあまりにも少なかったから、心配された、という事実がどうしようもなく嬉しく感じる。

………気を引き締めないとっ。

頬を挟むように両手で叩く。痛みがビリビリと脳に衝撃を伝え、舞い上がっていた感情が冷静さを取り戻す。

お兄ちゃんの足が止まった。

立つのはD組の前。

準備はいいか、なんてことはもう訊いてこない。お兄ちゃんは唾を飲み込む隙さえも与えてくれず、ドアに手をかけて、扉を左へスライドさせた。

途端、私は殺された。

一瞬の内に首を刈り取られ、腹を穿たれ、腕を三分割され、足を縦に拓かれ、軀をバラバラに切り裂かれた。

ような錯覚をした。

階段よりも、廊下よりも赤々とした教室。

転がる死体のどれもが、もはや人間であつたことさえ感じさせないほどに細々と微塵切りにされ、赤い液体をこれでもかと言つくらいにばら蒔いていた。およそ一人分だと思われる肉片の集合体は赤くてぐちゃぐちゃで、まるで二階から落として潰れたトマトのようだった。

吐き気は、込み上げてこない。

あの時　お父さん達の死体を見たときと一緒だ。

目の前に広がる光景があまりにも現実から離れていて、これらが昨日まで机を並べていた人達の成れの果てだと理解しているのに、

事実として受け入れられない。

これらは人間だったものじゃない。

生物だったものでもない。

ただの　　ただの肉片だ。

そんな肉片に囲まれて、教卓の上に座る一人の男の人がこちらを向いて笑っていた。

二十代前後と思われる外見。寝癖がついているかのようなボサボサの髪と、キリツと眉がつり上がり、如何にも真面目そうな双眸。そして、悪戯を成功させた子供じみた、愉しそくに歪められた口元。

一つ一つのパーツはチグハグなのに、合わせるとどこか完成しているように見える顔をした、黒いスーツに身を包んだ男の人は、右手で鮮血の付いた日本刀を玩んで嗤っていた。

「ようやく現れたか」

愉しそくに愉しそくに、嗤う。

私が錯覚したのは、これだ。

この笑顔。

一見無邪気なようにも見えるけれど、しかしよくよく見てみれば恐怖を掻き立てられる、笑みに歪んだ顔。

動くモノ全てを殺したくて壊したくて仕方がないという欲求がありありと伝わってくる。

間違いない。この男が犯人だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4567m/>

嘘つき二人

2011年9月17日20時50分発行